

504  
224

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18m</sup> 11 12 13 14 15

始



31. 5. 30

504-224



萬物皆戰

大正  
12.8.11  
内交

凡例

一本書全篇を通じて靈的に肉的に優勝劣敗利害得失所謂世上一さして萬物皆戦はざるなきの象を表示せり

一本書内容を分つて四篇とす、即ち上篇は主に國家社會的のものを記載し、中篇は宗教就中佛教禪理に因めるものを、下篇は主に宗演禪師に關したる事實を、尙附録として帆足女史に對する主張告白等を容めたり。乞ふ本書を座右の同伴として永く愛讀さん事を。

大正十二年七月

著者しるす

# 萬物皆戰ふ 目次

萬物皆戰ふ……………	一
何が爲に戦ふか……………	一
何が故に敗化せりや……………	四
兵は即ち是れ刑なり……………	六
勇あれば必ず慈あり……………	八
萬法は唯心の所造……………	一〇
三箇の寶劍を提げて……………	一三
武器の利なるに非ず……………	一三

目次

佛陀の救助を求めよ……………五  
 武士と僧侶との對照……………七  
 進歩すべき動物は人間なり……………九  
 一大靈妙の信念力……………三二  
**宗教と平和……………三四**  
 文明には文明の戦争あり……………三四  
 冤親悉く平等……………三六  
 相次いで起る内亂……………三九  
 宗演老師と梅干和尚……………三九  
 四海乾坤皆和平……………四一  
 盡十方の無礙光佛……………四二  
**舊道德の一本槍……………四七**

道德は國家の基礎……………五〇  
 國體擁護の快馬……………五〇  
**現代思潮と禪的思想……………四一**  
 濁水は依然として濁水……………四一  
 學問するよりも人格者たれ……………四二  
 現代學生の心理……………四四  
 未來往生と現代成佛……………四九  
 日本基督教徒目下の狀態……………五三  
 家庭的宗教と社會的宗教……………五四  
 禪三派現今の趨勢……………五五  
**所謂治者と被治者(上)……………五九**  
 きまり切つた相場……………五九

縁なき衆生は渡し難し……………六一

枯木も山の賑ひ哉……………五五

食足つて禮節知る……………七〇

所謂治者と被治者（下）……………七〇

金が欲しくば働け……………七五

天下は廻り持ちだ……………七九

苦しい時の神だのみ……………八四

はたで見て居る籠の鳥……………八七

宗教と其妙理……………九三

宗教の興亡と國運……………九三

語黙動靜體安然……………九五

禪の難易……………九九

佛も昔は凡夫なり……………九九

千江水あり千江の月……………一〇一

刻苦光明必ず盛大……………一〇五

標月の指叩門の瓦……………一〇八

孤峯の鐵淵……………一一〇

羊頭狗肉の敗闕……………一一〇

憎愛無ければ洞然明白……………一一三

馬祖の大喝臨濟の痛棒……………一二五

道は近きにある……………一二九

智情意三つの修養……………一二九

一物の心頭に掛る事なし……………一三三

**眞個の禪的要領**……………一三六

一般から見た要領……………一三六

誤つた意味の要領……………一三八

如才ないのも一の要領……………一三〇

不得要領の要領……………一三一

禪的要領とは何か……………一三五

得要領の必用……………一三七

**坐禪の上手下手**……………一四〇

好きこそ物の上手なれ……………一四〇

天性者を凌ぐ技倆者……………一四三

形而上と形而下と坐禪……………一四六

禪の活用に妙を得よ……………一五〇

**人間性の表裡（上）**……………一五二

善悪表裡の標準……………一五二

人間の本性作用……………一五五

社会一局面の現象……………一五七

**人間性の表裡（下）**……………一六〇

性善性悪と善悪混在説……………一六〇

善悪共無説は如何……………一六三

禪本来の立場から……………一六五

絶対善の特長……………一六七

**信仰と運命**……………一七〇



運命の二途……………一七〇

所……………一七二

時……………一七四

家……………一七五

親……………一七六

身……………一七七

信仰の有無……………一八〇

**山雲海月**……………一八三

料理の秘曲を盡す……………一八三

思ひくゝの合作揮毫……………一八五

バナマ帽子の書生姿……………一八八

**東慶寺と諸名士**……………一九一

招待の居士連中……………一九一

**閑話照顧脚下**……………一九五

足癖の同じい人……………一九五

飯粒を捨ふ一刹那……………一九八

よく間違ひられる……………二〇〇

**デユ井―教授と宗演禪師**……………二〇三

教授の履歴……………二〇三

佛教と基督教との差異……………二〇四

主客の二觀を除けば……………二〇八

神と佛と人と同一か……………二二二

物を考へるより働け……………二二五

三年前の今日を思へば……………二二八

もう是が最後か知らん……………二三八

読み度くないなら止せ……………二三三

柔い柿が食ふて見度い……………二三三

漸く示談で事は濟んだ……………二三五

圓覺寺の居士接心(上)……………二二九

接心とは何ぞや……………二二九

法戦の準備成る……………二三二

打せらるゝ事三十棒……………二三三

軍規を凌ぐ僧規……………二三六

圓覺寺の居士接心(下)……………二三九

高談戯笑を禁す……………二二九

身を切る警策の音……………二四〇

敵は本能寺にあり……………二四二

挑戦濟みて武運長久……………二四四

『尼僧より還俗への途』を讀みて……………二四七

最初の盲従的信仰……………二四七

基督教の天國と佛教の淨土……………二五一

聖僧と俗僧との比較……………二五五

人を信ずるか道を信ずるか……………二五八

金錢問題と禁欲主義……………二六二

目次 終り



# 萬物皆戰ふ

亞凡宗 軾師著

## 萬物皆戰ふ

何が爲に戦ふか

戦争!! 戦争!! 硝煙濛々骸を積み山となし血を濺ぎて池となすの有様、奮撃突進  
 怪風 颯々として砂石を捲くが如きは吾人の方に目撃しつつある現下の状態である  
 五ヶ年に亘る大戦振古未曾有の世界の大動亂も其の終息を吾げた平和の日は昨日今日  
 日、夫れに何事ぞ亦復第二の世界戦争を惹起せんとしつゝある全土の大勢は、日を  
 逐ふて刻一刻に急を告げて来て居るが何が爲めの戦争であらう。常に平和非戦論を

何が爲に戦ふか

首唱する米國すら排日の熱を白化せしめ、動もすれば朝鮮支那を煽動して帝國の威信を毀損し砲火を以て交はらんとしつゝあるや笑止千萬である。是等は日々各紙上に知る所の消息であるから別に記述するにも及ばぬが、今云ふ「何が爲めに戦ふか」と云ふ問題は是れを十人に問へば十人の答が皆區々であらう。而し乍ら其の答辯たるや萬人共通の所が必ずある。即ち「自己の勢力を擴張するにあり」と是れが勝たねばならぬ生存競争の結果であらう。水が自然に流れやうとして居るのを石が之を遮切る。此時若し石に防禦の力ありとせば水は防禦力の無い他の方面に向つて流れるが、此石に防禦力無しとせば水は其石を越えて且つ流して前方に進む様な事之れが石と水の戦争だ。互に己れの勢力擴張に努めて居る所謂生存競争なのだ。葉の花に止まる胡蝶松に據る又土に逼る蟲類樹林に棲む動物に到る迄、其保護色に生きるもの皆適者生存自己の勢力擴張に努める所以のものである。此の保護色に依つて他の鳥なり獸類なりに發見されぬ様生存して、鳥獸は又人間に發見されぬ様保

護色に依り又は夫れ相當の武器を持つて居るものである。常に境遇の順適した者が勝ち順適しない者が滅びて行くのが生物界の理法であらねばならぬ。茲に面白い小話がある。即ち「自然界に一陣を放てば極微細なる所に迄種々の現象がある。例せば木の葉の上に生長した黄色の苔があるかと思へば、こゝにはやがて蟬になつて來るべき夏の世界に活動しようとする入道虫が頻りに地上に出る準備をして居る。此の考へが又なかく面白。自分の身體に日當りをよくして身體の發育を計る爲めに、自分が籠つて居る冷たい地の上に土を大きく煙突形に築造して居る。すると今度は蟋蟀を殺さうとする家守が木に止つて居る。次ぎには其家守を殺さうとする小さな蛇が身を起し鎌首を擡げて身構へて居る。此間に小さな蛇を突き殺さうとして一羽の鳥が狙つて居る」と云ふ事が、單に裏庭の一個に狹隘な場所に演ぜられた生存競争の一現象に過ぎぬけれ共、生物社會は生物社會でやはり絶えず斯んな戦争状態を繰返して居るのに氣が付くであらう。

## 何が故に敗北せりや

人間界に於ても是と同般其初めは遊獵時代、夫が段々進んで牧畜時代から食物を一定の土地に於て獲ると云ふ農業時代に移つて行く。世の中が進歩するに付けて人口稠密の度が加はり従つて土地の擴張も必要になる。茲に於て他の土地に進んで行く。丁度水と石に於けるが如く侵入的行動に出づるより外に策はなくなるので、他國に移殖する様な有様になるのである。現下に於ける帝國の狀態は能く之を語つて居る。曰く南米曰くシベリヤ曰く南洋曰く北米皆是れ勢力擴張に起因するのである。又外國側にしても餘りに我が勢力範圍が膨脹すれば勢ひ其所には不利を見ぬでもない。されば排日熱となり日本封鎖等と高飛車に出で、日本の擴張に邪魔をする様になる。是の理論は怎しても枉げる事が出来ぬ。彼我の衝突は皆是れだ。古來より内に外に戦ひを挑む其主因を尋ぬるに皆己れの利權を満足せしめよう——自己の勢力を他に擴張しよう云ふにあるので、古代に逆つて行つて土器石器時代から鐵

器時代の今日に到る迄は幾多の變遷を経たか知れぬ。従つて戦争競争に依つて得たる物質的の文明も確に進んで居る。昔の矢の根石等が今では彈丸銃丸となり弓が鐵砲になつた事は著しい現象である。極未開の地に到れば其國其土地には蕃長なり、酋長なりが居つて、その統治者となり其の勢力範圍を治めて居たものが、次漸に種々に變化して今の政治的完全なものになつて來た。其の一國一郷が互に戦争をして居る間、結合力の強い者、所謂愛國の人民に依つて成る國は勢ひ他を壓伏すると云ふ。又弱者は所詮仕方なく後に居残り食糧を貢ぐ。食糧に依つて戦争は永續するからドコ迄も弱肉強食敗北者は優勝者の爲めに壓せられると云ふ。此の永續の間に敗者は敗者として復仇的の信念を抱き『何故に我は敗北せりや』と考へ考して以て來る戦争には兵糧武器を準備整頓すると云ふ。又戦争が濟んで相互に平和が保たれた後には甲にあつて乙になき物、乙にあつて甲になき物を交換して、有無相通すると云ふ事になる。此所に商業貿易が行はれ輸入も輸出も交換される様に

なる。幾ら昔でもやはり此の理は行はれて居たものである。相互の和議成立して通商を初めれば又其所には貿易戦争か商業戦争か、やはり水の流るゝが如く自己の利慾を全ふすべく種々の商策を用ふる。即ち之が商業に於ける策戦計畫とても云はるか。而し此の戦争的態度が社會の進歩を來す所以のもので、『戦争は向上の近道也』とは實に名言であらう。

兵は即ち是れ刑なり

而し物事には皆程度がある。生存競争も然り有無相通するも可なり向上の爲の勢力擴張もよし。然れども所謂強い者勝ちで弱肉強食の状態を際限なく續けたなら怎うか。社會國家は一日も安寧を保ち得る事は出来ない。故に共同生活を圓満ならしめ強者の暴横を制し一面に於て個人の生命財産を保護する爲め法律も設けられ刑罰も執行されるのである。そこで一國內の事は一國內にて治りもつくであらうが其國が世界に一つあるのでは無い。全世界を通じて澤山の數に達して居るが、

國と國との生存競争は、單に優越慾のみに止らず一國に於ける歴史あり道徳あり教育あり宗教あり、又前述の様に人の生存上版圖を擴めて行かねばならぬ。自國の權利を保護せねばならぬ。他に在留する所の邦人の生命も財産も何も彼も亦保護せねばならぬと云ふ種々な原因から、相互意志相通せざる時には止むを得ず砲火を以て交はらねばならぬ事にある。此の武器兵力が國と國とに於ける最後の手段、一國內の法律刑罰に換ふるものである。明教大師も『兵は刑なり』と謂はれて居る。然し敢て戦端を開けば必ず血の海屍の山を見て一の修羅場に化すと云ふは即ちが、事止むを得ないのであつて、危害を他に加ふる者あらば是を討つと云ふは即ち國家は人を殺すを禁じてあると共に夫れに對しては、何れも相當の刑罰があり刑法があるのである。此事あるに依りて社會は秩序安寧を保ち得る事が出来るのである。此は單に一國內の事であるが今云ふ國と國との戦争に於て又全世界の争亂に於ては怎であるか、茲には仁義あり博愛あり禮讓ありで無くてはならぬ。

兵は即ち是れ刑なり

勇あれば必ず慈あり

一體人は誰しも倫理的性情を有して居るもので、善を好み惡を嫌ふと云ふ良性がある。即ち堅き信念は何者も之を侵す事は出来ぬ。『吾れは忠君愛國の信念あり吾れは大和民族の個性を有す』と叫ば、正しき仁義の戦争に参加して必ず勝を得るであらう。『戦名なかるべからず』とは茲の事である。英國の首相アスキス曰く『今次の戦争は物質の戦ひに非ず精神の戦ひなり』と是れ常を得たる言ではないか。今時の如く交通機關の整備した時に當つては一つの國で精切の機械を造れば他の國が直に是れに倣ふと云ふ有様で、各國共に其の武器機械の點に於ては左程の差異はなくなるし、又戦争の時に肝要な兵數に於ても豫め算定せられて、何處には平時何十萬戦時何十萬ある事を知つて、敵に二百萬あれば味方も二百萬乃至はより以上の兵を以て對せねばならず一國の兵力にて堪へ難ければ常に成立する協商國とか同盟國とか何れからか助勢援護して略權力の平均を保たしむるものである。提燈と釣鐘と

やあ戦争にならぬも道理である。話は一寸横道に入るが埃地利の皇太子が塞爾維人の陰謀によつて暗殺せられた時、埃地利は非常なる暴行を以てセルビヤを威嚇した之れが二國相對ならば提燈と釣鐘で戦争にはならぬけれど、新進氣鋭の塞爾維は敵愾心を奮起して戦はんとすれど、埃地利の背後には強國獨逸あり遂に奈何ともなし難き矢先き同人種である露國と、五十年前獨逸の爲めにアルサス、ローレンの二州を奪はれて恨骨隨に徹したる佛蘭西は此際舊恨に報はんとして、共に塞爾維を助け英は露を助けて遂には世界の大争亂となつたのが、やはり武器に於ても兵力に於ても大差の無い所に實力の戦争は今日の如き砲火劍光の有様になつたのである。其所で大概戦争と云へば兵數や武器や軍艦の數に於ては左程に差異あるものではないが畢竟國民の氣力如何にあづかつて来る。宗演老師の座右銘にある如く『小兒の心を抱き丈夫の氣を養へ』とは茲なので『勇あれば必ず慈あり』の古言も亦宜なる哉。是れが即ち物質の戦でなく精神の戦たる所以である。

勇あれば必ず慈あり



儲て其の勝敗は何れにありや、即ち命もいらぬ金もいらぬ妻も子も更に顧みぬと云ふ覺悟で、只忠君愛國の信念を以て事に當るのである。昔勝海舟は非常に心膽を練つた人で所謂禪的修養を積んで心の戦争場裡を往復した人であつた。維新の當時江戸城開渡しの事で海舟を恨む幕臣共は、常に其周圍を付け狙つて居た。或時海舟の後より鐵砲を向ける者があつたので海舟フト氣付き願て曰く「其んなへツピリ腰に此海舟が撃てるか……喝」と食らはせたので其者は雲を霞と逃げ去つたと云ふ。即ち彼れは鐵砲を頼みとして心に定る所なく、海舟は確に心の戦争に於て大勝利者であつたのである。

萬法は唯心の所造

吾等の心的状態を観察しても常に絶えず心と心とが戦つて居る。所謂悪心と善心と何事につけても戦つて居るが、萬物皆戰ふ其根源はやはり此の心にある「萬法は唯心の所造なり」社會の事々物々は皆物質的原因に依るのでなくて皆自己心より起

るものである。此の萬物皆戰ふ中に立つて我々の覺悟は怎であらう。勿論戦に負けてはならぬ。勝てば官軍負ければ賊とヘコタレ主義になつては駄目。仁義道德の上より正義人道の點より起る事止むなきの戦とならば金も捨てよ生命も捨てよ。只心其ものを以て戦つて貰ひ度い。所謂之が正當防禦、商業の上にも工業の上にも於ても乃至は、教育宗教藝術あらゆる萬般に於て皆悉く戦へよ。勿論國防の大任を負ふ軍人にありては餘程フンドシをしめてかゝらねばならぬ。大正三年十一月三日恐れ多くも在郷軍人会に下し賜はつた御詔勅の御文は尙更の事なれど「國思ふ道に二つはなかりけり、戦の庭に立つも立たぬも」と云ふ御製を拜讀しては轉た奮起の心の起らぬ者はあるまい。彈丸飛雨の中に立働く軍人も農工商に携はる人々も共に俱に此の一大信念を保持して、萬物と皆常に戦はねばならぬ。郷に在つては忠良なる臣民と呼び軍に従つては國家の干城となり、戦時も平時も將來益々帝國の前途に光明を放つべき忠君愛國の美德、大和魂、大和民族の固有性や又實に此の一

大信念だいしんねんに外ほかならぬのである。

・ 二個の寶劍を提げて

武器の利なるに非ず

抑々我邦おぼくわがくにが外國ぐわいこくと、初めて箭戈せんかを交へたのは、人皇十四代仲哀天皇じんわうじゅうだいちゅうあいてんのうの御代みよで、神功皇后こうこうこうごうの三韓征伐さんかんせいばつと云へば三歳の童兒どうじも之を知るであらう。其れ以來いらい後世こうせいに至つて事は小さいが、繼體天皇けいたいてんのうの御宇ぎよいうに新羅しんらが筑紫つくしの國造磐井こくぞういはいと結托けつたくして、我邦わがくにに反した事がある、朝廷てうていからは、物部麤鹿火ものべあらかひを遣はして之を討伐たうはつせしめた事、又三十七代齊明天皇めいてんのうの御代みよには百濟くだらの請援しやうえんに依つて吾邦わがくにからは朝鮮てうせんの地ちに出兵しゆつせいして唐たうの暴軍ほうぐんを破つた。それから寛仁三年くわんにんねん刀伊たういと云ふ一種しゆの部族ぶぞくが、吾わが壹岐いっきを襲撃しゆうげきして邦人ほうじんを苦しむる事夥おほびたしきが爲め、時ときの大宰府權帥藤原隆家たいざいふくんのすけふぢはらたかいへが、兵若干へいじやくかんを以て之を擊退げきたいした。其後は、暫く中絶ちゆうぜつの有様ありさまであつたが、恰あたも九十代龜山上皇だいかのやまじやうわうの末すゑより次代後宇多天皇じだいこううたてんのう

武器の利なるに非ず

の御代にかけて、文永、建治、弘安の頃には、彼の有名な而も其當時にありては振古未曾有と云はれた、蒙古軍の大襲來といふ危難が起り、一時は天下を危機に迫らしめたことがあり、それより後陽成天皇の文祿元年、秀吉の朝鮮征伐に至る迄は、別に何事もなく、内輪喧嘩位のものであつた。元治元年の頃には佛米蘭英の四聯合艦隊が、吾が下關海峡を襲撃して發砲したことから始まりて外交問題が次第々々に重大となり明治年間には日清、日露の二大戦役となり近くは世界の大動亂の影響として彼の青島の戦ひがあつた。斯ういふ風に歴史から歴史を辿つて見ると、随分吾邦も交戦をした——好戦國と云はれても一應は無理でない程——而し有史以來の我國戦局面を観察するに、其戦術と云ひ戰略と云ひ、益々發達に發達を加へ、勝利に次ぐに勝利を以てし、未だ嘗て、他の侮辱を蒙りし事なく、従つて國運は愈伸長せられたと云ふものである。

蓋し是れ軍人の多きが爲めに非ず、兵器の利なるが爲めに非ず、と云ふて富に餘りあるが爲めでもない。唯茲に二個の名劍あつて其基因を爲したからである。二個の名劍とは何か。即ち日本民族が本來固有せる、其勇活健潑なること獅子奮迅の如く如何なる大魔王も後へに撞着たらしめ、其宏廓優雅なる事大白象王の如く、如何なる惡鬼も羅刹も前に悦服せしむべき靈能を有する日本魂是れである。

佛陀の救助を求めよ

他の一は殺活與奪に其妙用を現はし、益此心魂を鍛鍊研磨して向上更に向上せしむべき、大乘佛教の妙理、換言せば宗教其物なのである。而し茲に二者を取り出して論及はしたものの、日本魂も宗教其物の妙理も一にして無二。元來佛陀の本性に外ならず只分れて、二用となつた丈けのもので、或時は殺人の刃となり、或時は活人の劍となり、室を出づれば光針閃爍夏尚寒く、之を收むる時は雲光結んで紫氣稜々。或は北條時宗の元寇織滅となり、豊臣秀吉の朱明蹂躪となり、又は「何事ぞ花見る人の長刀」で閑日月の風流事を思ひ起す事さへもある。而し此二者は恰も

鳥の兩翼に似て離るべからず互に相融じ相助成し、益々活動發展して以て、大にしては世界的に小にしては家庭個人的に、全人類を悉く靈動化せしめ得べく、日本民族殊に佛教信者にありては、實に此二者を辨へ、日本魂は畢竟宗教のあらはれである事に自覺を置かねばならぬ。是所謂鐵をも斷つべき腰間三尺の秋水なれども亦、花見る武士の長刀たる風流を雅味し得ると云ふべきである。是に到らば干將莫耶の名劍と云へども恐らくは、及ばざるであらうと、自惚顔して、世上の事物を看取し來れば必ずや一步も二歩もふみはず恐れあるもの充棟も管ならず。或は却つて怨敵の爲めに擒せられ、或は沒靈的愛泥に踏み迷い、あはれ無理想無趣味なる暗々黒裡に違ひ、竟には悲惨なる失望苦悶の境地に、沈淪するを免れまい。蓋し失望に陥り苦悶に悩むの輩も、早く自己が敵の爲めに擒せられしに氣付き、自己の力あることを意識したならば、或意味に於ては勝れる點もあり、自己の苦境に氣付かず何等宗教的觀念の無き輩よりも佳とすべきである。所謂失敗は成功の本で、大活現

前を得る爲めの死地没落であるから——失望苦悶に陥るものは、活ける佛陀の救助を求めよとは、敢て私言ではないと思ふ。抑も佛陀は汝等悲しむを已めよ、勇猛精進せよ汝等に最大の力と糧とを與へ且つ、汝等衆生の前途を照し其所願を達せしめんと告げ給ふ事を知らば、何の憂慮する所あらんやだ。遂には勃々たる日本魂我是を有すと勵聲疾呼!! 一番せんか。正義の前に何物か屈せざらんや。茲に於て我等は無限の慰藉と、眞堅なる獎勵とを得て奮然蹶起、失望も苦悶も滅除に歸し、一大使命を遂行するの勇は滾々として已まざるの快感を覺ゆるであらう。あゝ偉なる哉日本魂よ。靈妙なる哉宗教的感化よ……。

武士と僧侶との對照

是に於て吾は宗教の必要を認めざる者は、永久的生命を得ず。靈性全く塵芥の爲め陰蔽せられしものと云ふても敢て憚らぬと思ふ。夫に今猶無宗教を唱へ、信教を恥づる卑見の徒あり、或は吾宗教は元來世道から冷淡視せられつゝありとし、

種々なる謬見を恣にする者あるを目標して居るのであるが、彼等論者は自己の淺薄を以て他に比するのであつて、若し然らずば吾れと吾身を罵詈訾するものであるまいかと思ふ。國民が宗教を冷淡視する様の事では、之を信する事は到底出來得ぬ。先づ或時代にあつては、一般社會が文弱に流れ、新思想（今で云へば西洋文明とかハイカラ思想とか云ふ）の輸入に急なるが爲めに、ホンの一時的に宗教が重んぜられなかつた事もあつたらうけれ共、而し吾國民が一時的現象に惑亂さるゝ國民性でないことは、建國以來の歴史が證明して居る。上古は暫く措き奈良平安の兩朝から、鎌倉時代の如きに至つては、宗教思想最高の時であつたらうと推知すると同時に、美術工藝文學に到る迄一として、宗教をはなれて發達したものは無い。必ず宗教的感化は何等かに依つてあらはれるものである事は今更言を俟たない。物質的文明の輸入には昔から皆、多少の宗教家が預つて力ありし其實例は屈指に違がない。まして泥んや武士と僧侶即ち楠正成と楚俊禪師、北條時宗と佛光國師、武田

信玄と快川國師と云つた様な對照、武士道鼓吹の盛んなると同時に隆盛を極めた鎌倉時代の大乘佛教の如き、説き出せば限りもないが先づ斯んな場合で、無宗教を唱ふる今の人々は氣の毒千萬、自己の淺薄を自白するのみならず、自ら心靈を晦し、又自ら精神的自殺を企つる者と云ふ可く、斯んな風でどうして折角持合せの日本魂の堅固な精神が出るものか、さて歎かほしい次第ではあるまいか。

進歩すべき動物は人間なり

併し近時實に驚くの外はない人智の進歩社會の發達。同時に、以上の如き淺薄なる徒輩も次第に凋落し稍宗教的觀念でも云はうか、其必要を認めて來る様になつた事を知つて、喜ばしい限りであると思ふ。或人は斯う云ふ事を云ふて居る「進歩すべき動物は人間なり」と。是れ實に面白い。人には欲慾があつて精神と云はず物質と云はず、より以上の希望を持つて居る。進めば進む程萬事益々美的に向上して遂には最高の靈域に超達し、不可知の所即ち絶對無漏の所に融合一致せずんば罷

進歩すべき動物は人間なり

まざるのが進歩の進歩たる所である。個人と云はず社會國家との論なく、日進月歩國運向上は旭日東天の勢ありて罷むことなくば、帝國は人道の鼓吹者文明の指導者としての大使命を果し得たと云ふべきである。我等が茲に自覺の眼を開けば、小我を没却して胸宇天空海淵、只各自其天賦の職分に忠實に勇往邁進せねばならぬ。然し一難去つて又一難、人事百般複雑な世の中には、なか／＼順ばかりは續かぬ。逆もあれば波瀾もある、曲折もあれば苦しみもある。其目的地決勝點に至る迄の間、靈域に超人する迄には幾多の障害物を排除せねばならず、幾多の又内的怨敵と奮闘一番して之を降伏せしめねばならぬ。而し其れには天地未發以前の、人工を加へざる這個二寶劍を何處迄も擁護して往かなくてはならぬ。

茲に幸なる哉近頃青年諸賢が、頻りに心靈の慰藉を求め、靈活力の發分でも得やうとして、宗教に耳目を接する者日に多きを加ふる現象となつて來た。之れ偏に今云ふ進歩しつゝある其向上心の賜物であらう。換言せば内的靈化の域に進み、深

遠なる理想、高邁なる精神を宗教に依つて求め、活潑々地の人物と聖賢とを、宗教に依つて打出せんとする傾向を示すに外ならぬのであらう。

一大靈妙の信念力

於茲吾は妄言駄語とは知りつゝ又、何事かを云はんとするのであるが——多くの人々が宗教を求むるに急なるが爲に、其選を誤り羊頭中狗肉に墮在することもあらばやと、いらざる心慮を煩はして居るのである、或は是に吾等佛教僧侶が布教の道傳道の法を怠れる罪なしとも云はれぬ。幸目今機運既に熟達し、社會は鶴首の有様で宗教々々と叫びつゝある故、此好機を逸して更に何れの時をか待たうや。起てよ佛教僧侶諸師醒めよ佛教信徒諸氏、二つの寶劍名刀は各自の胸裡にあり。飽く迄之を研磨して、馬觸れば馬、人觸るれば人、悉く殺し盡して後、花見の長刀も宜からう。自覺を要するの今、寵居逸樂の秋ではない。僧も俗も男女も老若も悉く此の二つの寶劍を掲げて行け!! 何處へ?

若し佛教にして振興する事なからん歎。是れ國家の不幸のみならず、人類の不幸亦之より大なるは無い。其存亡只這裡にあり。

宗教的精神のあらはれなる此の日本魂は千五百年餘來、靈妙なる大乘佛教を以て愈々鍛鍊せられ益々研磨せられたれば、たとへ現下の新思想の潮流が暖流であらうが、寒流であらうが、舊思想舊道徳の呼はりをされ様が、日本魂は一以て之を貫く大真理だ。ごこ迄流れて行つても日本魂はごこ迄も日本魂であると同時に、之をごこ迄も守護すべきは吾が大乘佛身の大靈妙の信念力である。あゝ我國唯一の利器たる此二大寶劍――

此の佛教―宗教―を以て練り上げし日本魂さへあらば、如何なる外敵内仇も何のその、此魂一度發しては武士道となり、愛國の觀念となり、沈勇毅敢となり、平等慈悲、忠孝貞節、堅忍正義となり、所有道徳の根本となるので、斯くの如き眞善美を具ふるもの眞に是れ、佛教的日本魂である。斷言して止まないのである。噫我

國民は外人の窺ひ知る能はざる最も偉なる且つ、最も靈なる日本魂を有し、又之を圓滿に發達せしむべき大乘佛教否、完全なる宗教を有して居る。此二者を有する吾人の得意は如何であらう。是れの鍛鍊と發揮は國民として片時も忘る可からざるもので、亦佛教たるの本能ではあるまいか。

要するに吾人は此の二つの寶劍即ち、日本魂と佛教の指導に依つて、益々向上し其向上に依つて日本古來の武士的建國の精神を顯現し得る事も出來れば、引いては東洋平和の保全も現はれ、靈的日本帝國の建設せらるゝも遠きに非ずと信じて前途に多大の光明を認めて居る者である。

## 宗教と平和

文明には文明の戦争あり

塞埃獨佛先づ干戈を以て相交り、屍山をなし流血河を成の、大修羅場を演出し、遂には世界の動亂を惹起し、さながら阿鼻の大地獄も、斯くやとばかり思はれて悲絶慘狀眼も當られぬ程慘酷な光景を打續けた彼の大戰亂——而も振古未曾有の世界的戰禍も、漸く茲に終結を告げた。

抑々古今大小を問はず、彼我戰端を開きて敵味力共憎し／＼の敵愾心からして、負けず劣らず鎬を削り、生命のやりとりをして、人生に於ける晴黒面の行爲を敢てし、遂に龍攘虎搏剛者伏弱、殺伐の氣に維れ圍繞せらるゝは、より以上の幸福なる平和を將來に得んとするが爲め、餘儀なくせられたる一手段に過ぎぬのであつて、

決して戦争殺伐を以て雌雄を決すると云ふ、ごこ迄も野蠻的精神があるわけではなからう。又其れ自身を以て目的とするものでもなからう。故に社會相互間は果して確實なる平和が、將來せらるゝならば何時なん時でも戦争を止むるに躊躇せぬのであらう。由來戦争は野蠻の遺風であるとは謂ふけれ共文明にはやはり文明の戦争がある。云はゞ戦争は吾人生存競争上免れ難きの一現象であつて、波瀾曲折有爲轉變は人生の常則である。是ありてこそ實に文明は進歩の階段を築く事が出来る。之を消極的に言ひ換へれば、新陳代謝常に停滞なしとも云はれよう。併しながら戦争は終局の目的でなく、平和の城文明の境に達せんとする手段に過ぎぬ事は慥である。それであるから、五ヶ年に亘る世界の動亂が終了を告げた所以のものは、平和其ものゝ光明が炳として、人道を照したからで、此の光りは實に宗教道德の賜であり、且つ現はれでなければならぬ。

實に宗教と云ふのも、社會現象の一に外ならぬのであるから社會の動搖につれ

文明には文明の戦争あり



ては動搖し、平和の光明と認められない事實ある事を、拒む事も出来ぬ場合がないでもないが、しかし是れは宗教の面目ではない。宗教を以て處する者即ち「完教家」は、此場合に際しては飽く迄、努力奮闘して、平和の光明を宣傳し、宗教の眞面目を發揚せねばならぬ事と思ふ。是れが又宗教者の一大任務であらう。

宛親悉く平等

さて社會は複雑である。科學者もあれば文學者もある。美術家、藝術家、實業家、其外枚舉に遑はない。我々宗教家も其中の一つだ。各社會の見る眼は、去る世界の戦亂に對して如何であつたらう。科學者は科學者で、未發の藥品を發見して、斯界に其の貢獻を多大ならしめたであらうし、文學家美術家は又其れ相應に、所謂壯美の極致であるとして、戦争場裡に文筆を投じたであらう。其んなら宗教家は如何に是を眺め、如何なる感想を抱いたであらうか。余は宗教家を以て自ら任ずる程の者で無いから、今余の感想如何を吐露して發表する價もないが、只古徳先賢の所謂言動

を聯想し、戦亂に對して如何なる働ありしか、將又精神的如何に平和の光明を以て、國家社會を照臨したかを縷述するに過ぎぬのである。

我國の歴史上、外國に對する戦闘の著大なるものは、初は彼の弘安の役である。余の常に敬崇する圓覺寺の開山佛光國師と、其當時名聲高かりし北條時宗との關係に就いては、屢々話材となり教材となつて、いろ／＼な事に因述せらるゝ事であるから、茲に余が喋々する迄もないが、弊師楞伽窟老師の常に語らるゝ、一言半句が時々、腦底に微存して居るから、之れも一つ取り出して話さねばならぬ。此の弘安の役と云へば、直に北條時宗を追想する。時宗を思へば弘安の戦役がついて廻る。従つて圓覺寺、佛光國師、一と聯想は聯想をつゞける。勿論時宗は佛光國師を師と仰ぎ、常に敬慕の念厚く専ら求道に餘念がなかつた。一朝蒙古襲來して、我帝國を吞却せんとする其時、國師はどうであつたらう。蒙古の驕暴を惡み其降伏を祈禱し時宗が出陣に際し、大いに此を策勵した。此時の商量等は皆御承知の事であらう

から、茲には略して置かう。兎に角佛光國師は當時宗教家として、一大巨匠であり泰斗であつた。而して弘安大役後の國師の見地は如何であつたか。即ち宛親悉く平等である事を説示し王ひ、敵味方の差別なく其戦死者を弔せられた。國師の痛棒下に参じた時宗とても亦師と同感、其信念は遂に佛菩薩の供養と成り、寺塔建立の擧を見るのであつた。余が授業寺である、鎌倉東慶寺の開山覺山和尚と云ふは時宗の内室で、時宗が圓覺寺の開基たると同時に、自らは東慶寺の開基たるを發願した位である。殊に時宗は自ら發願して、地藏菩薩を造立した。國師之を可とし、其開眼供養に導師を諾せられ、嚴かな法會が修せられた。此時の法語にもやはり、宛親平等説が明かに示されてある。

『前藏及往古。此軍及他軍。戰死與溺水。萬衆無歸魂。唯願速救拔。皆得超苦海。法界了無差。宛親悉平等』云々  
 佛敎の教義から見れば、尋常平凡の法語でもあらうけれ共、時宗出陣の時、國師

と商量を試み、師から貰つた策勵語たる偈頌を見て後、此法語を見れば、自ら人の意嚮を惹くところがあらう。斯の如きは實に、宗教家の感念を吐露し盡したものと云ふてよからう。

相次いで起る内亂

弘安の役後に於て、著大なるものは後陽成帝の文祿元年に起つた、文祿の役であつて、前後の事情は大いに相違して居るけれ共、其外國に對して戰端を開いたと云ふ點から云へば同じ事、豊臣秀吉が朝鮮征伐の雄圖は、實に驚くべきものである。此役には加藤清正、小西行長、小早川隆景の諸將何れも、勇を振ひ武を鼓して、目覺ましき働きをし、敵味方の戦死は無慮數萬を算したと云ふ、實に悲惨壯烈一方ではなかつた。此戰亂の終了後、宗教家ではなかつたが、出征武將の一人たる、彼の薩摩侍徒島津義弘、紀州高野山に朝鮮陣死者の供養碑を建立した。其碑文に大書して、宛親平等の意を明白に表示してある。即ち『爲高麗國在陣之間敵味方同死軍

兵皆令佛道也』と。是れも決して義弘一人の企圖ではなかつた。其後には吾門で有名の大應國師があつた。其の心盡しは實に一方でない。之れ眞に宗教の眞面目が發揮せられて居ると云ふべきである。文祿の役後、外國との交戦は暫く止んだが、内地の戦争はなかくよく續いた。先づ慶長五年やはり後陽成帝の御代には、有名な天下分目の關が原の戦あり、慶長の末から元和の初めにかけて、十數年を経て冬の陣と夏の陣とあり、明正帝の寛永十四年には島原の亂あり。すつと後に孝明帝の御代になつて、事は小さいが櫻田の變とか、坂下門の變。或は蛤御門の變やら長州征伐やらで、萬延から元治慶應にかけて世はいろ／＼に亂れた。明治になつて王政復古の令出づると間もなく、伏見烏羽の戦から、戊辰の役、函館戦争、佐賀の亂ありて、明治七年には臺灣征伐あり、十年から十五六年迄には、小さな變亂が相次いで起つた。就中西南の役は日本全國に影響を及ぼしたのであつた。明治廿七年には朝鮮に東學黨の亂起り、此れが動機となつて、日清戦役が始つた。此の戦は今で

こそ『チャンコロ』相手のイクサだと云つて、馬鹿げた様に思ふて居るけれ共、其當時はなかなか大へんなもの、領土の面積から云ふても、人口の比較から云ふても、到底支那には及ばなかつた。此大役後相互の死傷者は一通りでなかつた。次に起る北清事變、此れも亦甚だしき死傷者があつて各國共皆、戦火を亦へたのであつた。

宗演老師と梅干和尚

茲で思ひ出したが、今は故人となられた飯田道一和尚の事である。師は道念厚く自ら志を發して、尾州八事山に於て大齊會を設け、一千僧を供養して以て此變に出陣し其義に殉じて戦死したる夥多の精靈を、懇に追弔せんとせられた一事。しかも當時の賣り出し晝家富岡鐵齋翁に囑し、一千揮の扇面に各一羅漢像を請ひ、遠近有道の僧に就いて供養しつゝある事こそ、一視同仁、宛親平等のこゝろと謂ふべきだ。日清戦争の時等には、梅干二十石を名古屋市に行化し、外征軍を慰問し、『梅干和尚』の名聲、天下に冠たるは、行は卑にして意は尊なりと云ふべきか。實に慈悲

心より出でたるに外ならぬのである。話はいろ／＼になつたが、日清戦役後は日露の大戦になり、世は多大の動搖を來し、殺氣乾坤に滿ち充ちて、日清戦役以上の大難戦であつた。日露戦争實記を一讀しても、如何に其慘狀甚しかりしかゞ解る。當時弊師宗演老師が第一師團長東伏見宮殿下に扈從して從軍布教に出陣せられた情況を、今聞くだに尙身の毛のよだつ感がある。大正の御代に至つて、青島の戦あり而も連戦連勝、逆つて考ふるに、元寇襲來以後、毫も敗北を受け、外國の恥辱を蒙つた事のないのは、之れ歴代帝王の御威稜に依り従つて帝國民四海同胞の忠君愛國の念堅固なる所以ではなからうか。

以上は一二の實例を擧げた迄に過ぎぬが、戦亂のある度毎、其當時の諸高僧、所謂宗教者たるものが教化誘導し、無理に冤親平等と説かなくとも佛の大慈大悲の願輪に鞭ちて、縦横自在に馳せまはり、只管社會人心の平穩和融に努めた自實は極めて多い。我國の歴史で外國に對する戦争と云ふものは、餘り多くはないけれども、

内國同志の戦争、俗に云ふ『コゼリアヒ』なるものが甚だ多かつた。

#### 四海乾坤皆和平

織田氏の頃に起つた、群雄割據—戰國時代—は其大なるものである。敵と味方と對峙する形は、内外古今の別はない。やはり敵は敵、味方は味方だ。斯云ふ風に敵と味方との間に奔走して、講和談判の使者となつた高僧方も随分ある。仲裁—此仲裁が平和の曙光なので、博愛慈悲なる宗教道徳に依つて放光する所以である。

釋迦孔子耶蘇の立場なる、慈悲や仁や愛やの眞福音は、人性の眞相本質—徳は聖人の偽作に非ず—なる事を鼓吹して、無限の博愛無縁の大慈悲の最後の勝利者たる事を確信するものである。「佛心者大慈悲是也」とか「神は愛なり」即ちゴットイツラヴなりと云ふが、冤親平等、平和の光に照らさば、吾人の認めて以て向上の一路となし、人生の眞理想として、憧憬するに憚らざる崇高なる教旨と云ふべきである。其れであるから人間活動の靈源もまた是から來るし、佛陀精進向上の主義もまた眞に是れに外ならぬのである。願れば惱みに惱みし世界的大戰亂も、終結し、四海乾

坤皆平和を唱導し、而も宗教—道德—的觀念の日々に榮ゆるは、是れ基督教佛敎を問はず、苟も宗教を信奉する者の、鞠躬盡瘁求めて精進すべき最終の理想ではなからうか、若し然らずんば、多年の戦闘何の益かあらんや。又戦戦其ものゝ意味は無いのである。

一朝平和を體現し、常に慈悲博愛の聖旨を遵奉して、仁と愛との間に人々相互、融和同化する事が出来たならば、實際に虎豹と羊子とが同居し、狗子と猿兒と同飯して、相害せざる天國の實現であり、娑婆即寂光土の理想境を得る事が出来るのである。一切宗教の根本義も亦、實に此外に出でず、白人黄人黒人の別なく、男女老幼の差なく、凡聖賢愚の論なく悉く平和の光明中にあるのである。即ち言ひ換へれば、人には皆宗教心ありと云ふても差支へない。平和の光、慈悲仁愛は總て宗教其ものゝ特産物であらう。其宗教を以て大なり小なり吾が立場として居る、宗教家にあつては、是非共是れを具體的に實現し、社會國家を利生せねばならぬ。或は慈善

事業の一端に加つて、己れが續く限りの心盡しをやつたらそれでよし、其人々に應じた宗教特有のものを發揮して、世の治安を計り、平穆和融につとむべきであらうと思ふ。之が所謂斯界に立つ人の任務ではなからうか。

盡十方の無礙光佛

物の解釋も、時と處と境遇とに依り、いろ／＼違つて行くが、只單に『平和主義主張』『戦嫌ひ』の意味でもなければ、『戦闘主義』『戦好き云々』と云ふ様な小區別的のものから割り出した平和云々で無い。戦争だつて戦時の戦争もあれば、平時の戦争もある。生存競争上人類社會が互に長短相補つて物質上のみならず精神的に競ふ道德の戦争もある。宗教家は所謂宗教道德中に生きんとする爲に此の生存競争にあくせくして居る。精神的砲煙彈雨は、四六時中吾周圍に注がれて居る有様—商業戦争—實業戦争—科學物理の戦争—と云ふ風で、社會は悉く戦争場理にあること同じいのだが、只之を一轉して、平和の戦争中に包括して、精神的活動に生きたな

ら、各社會何れも生存競争中に而も平和和融の現象を見る事が出来るだらう。我々は大いに平和の光明を發揮せんが爲め、宛親平等と説き、殊に一朝内外に事あらば慈悲を以てし仁愛を以てせねばなるまい。親鸞上人は『盡十方無礙光佛の、大慈大悲の願海に、煩惱の衆流れ歸しぬれば、智慧のうしほと轉ずなり』と御示しになり先帝陛下の御製にも『四方海、皆はらからと思ふ世に、なご波風のたちさわぐらん』とあるではないか。又増一阿含經の中に『四大河入海已無復本名字、但名爲海、有四性出家學道無復本姓、但言沙門釋迦子』と謂ふてある處を見ても慈悲仁愛の中に、人々相融和同化する事を得たならば、沙婆即寂光土の理想境を實し得る事が出来、平和の光明中に生きる事が出来るのであらう。即ち是れ宗教の信仰に基づく所以であると深く信するのである。

## 舊道德の一本槍

### 道德は國家の基礎

世界に於ける日本の立脚地は益々重大を加ふるの今日、祖國現下の大勢はどうであらう。思想問題の有無は勿論だが、曰く労働問題曰く食糧問題曰く日米問題、或は曰く日支西伯利亞問題等數へ挙げれば實に限り無い。就中思想問題に到つては此頃漸く白熱化して三千年來鍛錬し來れる國民思想を動搖せしめつゝあるのみならず、之を腐化し去るの危険に陥らしめつゝある様に思はれる。改造々々の聲は各方面に高唱せられ、破壊云々の鐵槌は到る處に下されて、目下人心の不安社會秩序の動亂は眞に前古未曾有と云つても宜からう。讀者諸賢よ是等の事實を思考しつゝ、世界の風潮時流を一瞥一見せば、轉た憂慮に堪えざるものがあるであらう。徒らに

成金の氣分に浮かされて、情氣満々隔岸の火災視して太平樂を夢みるの秋ではない。茲に到つて僧も俗も老若も男女も擧つて忠孝の大義を宣傳し、國體の精華を煥發せねばならぬ。さて茲に最も肝要とするの一事がある。所謂道德問題是れである。道德は國家の基礎であり且つ思想の大本であるにも拘はらず、舊を捨て新を取り歐米の新しい思悲に依つてのみ生きると云ふ様な考へを以て、無暗に西洋かぶれに陥つて居る連中が、陸續として出て來るに到つては道德の新舊を論ずるよりは、道德其物が無視されて終まう。勿論宗教的思想も滅滅されるであらうし、所謂人倫も人格もあつたものに非ず、只個人主義を以て新思想であり新道德であるかの様に思はしめて終う。是れ明治大正を通じて五十有三年、西洋文明の輸入につれて之れに伴つた外來思想なのであつて、今や車夫も馬丁も下女も下男も一聲に『デモクラシー』を口にし『サボタージュ』を以て超然として居る様な傾向では、祖先崇拜の信念、報本反始の美德を毀損するのみでなく、舊思想は悉く崩壊される様な感がある。

國體擁護の快馬

斯に於てか、吾が宗教家は勿論入心指導にある教育家道德家は、半夜枕を蹴つて奮起し、忠孝一本槍の道德を大いに宣傳して、此の個人主義を排し、危険思想を除き、皇室中心主義を眞向にふり翳して奮闘せば、國體の精華は輝然として光芒實に入絃に照り榮えん事、期して待つべきである。

斯く云へばとて私は決して固陋の幣に囚はるゝには非ず、又舊思想を以て滔々たる世界の新思潮にどこ迄も對抗せんとする程の馬鹿でもないつもり只唯萬世一系の皇室を奉戴して居る吾國七千萬の同胞として金甌無缺の此の國體を擁護せんと欲するのであつて、且つは時代の推移進運に伴ふて、内は國利民福を増進せしめ外は治く世界の人類に日本帝國の眞意義を知らしめんとするに過ぎぬのである。一口に新道德と云へ舊道德とは云ふものゝ、なか／＼一朝一夕にして之を説き盡す事は出来難い程六つかしい道德問題、新に對しての舊、我國二千年來の舊道德、忠君愛國の

大義名分に至つては千古萬古之れを自滅瓦解さすが如き事あつては一大事、如何なる思想の宣傳に逢ふとも、必ず我國民にして此の大精神舊道德を滅却してはならぬ。行けよ舊道德の一本槍にて。進めよ國體擁護の快馬に鞭つて！。

## 現代思潮と禪的思想

濁水は依然として濁水

現代思潮とは何か。曰く自然主義曰く社會主義曰く共產主義曰くデモクラ曰くクロボト曰くマルクス等、枚舉に遑なき寒暖緩急の潮流が、或は西或は東して居る。是の混沌たる思想の潮流を指して現代思潮を意味して居るとするのが、一般の解釋であるが。果して眞に是なりや否やは一考一考しても尙充分に餘裕のある事と思ふ。抑も思潮が紊亂を來たし人心が動搖を重ねるに至りし其の原因は、世界の歴史的原則より推して確に精神的にも物質的にも所謂新陳代謝其物が是である。現代語言にて之を社會改良と云はんか、時代改造と云はんか。兎に角新陳代謝とは一に發達進歩を促すべき理法にして日進月歩、より以上文明の域に達すべき理論に外なら

濁水は依然として濁水



ぬのである。して見れば現今社會に漲る紊然たる數多の主義思潮が總て悉く、社會改造の資となり時代の推移に伴ふに適するものなるや、果して之等が文明の先驅者たる光輝を放つものなるかは、茲に推斷する事は出來得ぬ。何故なれば彼に於て適當だつたものでも我に於て適せぬ場合がある。所謂人情風俗習慣、其國家其社會從來の制度基礎に立却せねばならぬからである。

想ふに文明とは世の輕薄兒が無意識に謳歌しつゝある現代社會の狀態の如き夫れなるか。若し斯くの如きものとせば吾に其の半面にさへ似ざるものにて、主義も思想も主張も何の意味を有せず濁れる水が只風のまに／＼波紋を生ずる狀態に過ぎぬ感がある。只濁水に一種の變調を見た丈で濁水は依然として濁水。眞の新陳代謝を語つて居ない。夫れ文明を歴史的原則より割り出して眞の新陳代謝視すると云ふものは、吾に社會國家の變調を代名するの謂には非ず、且つ其の改造と云ひ改良と云ふも亦單純浮薄なる、形式的新陳代謝では決してない。文明が新陳代謝であるなら

ば必ず茲には社會國家に合理的な者を以て、新陳せしめ代謝せしめ愈々文明の域に達せしめねばなるまいと思ふ。現代に唱道せられつゝある社會主義も自然主義も何主義も何主張も決して當て箴つては居らぬ。要するに文明々々改造々々と現代的思潮を以て、得意がる御歴々方には輕佻な形式的頭腦を撤回して貫はねば適材を適所に用ふるの好績は擧がらぬであらう。茲に予は文明の意義を少しく、吐露して見ようかと思ふ。

#### 學問するよりも人格者たれ

文明と云ふ中にも精神的文明を主とするあり物質的文明を主とするありて、前者が果して形式的か充實的か後者が果して形式的か充實的かは一概に斷定はし得られぬけれ共、其時代々々の推移に鑑みて兩文明の調和發達を以て、眞個其の國に於ける文明と云ひ得る。が而し此の意味に於ける現代文明の價値果して如何と問はゞ、云ふ迄も無く物質的方面にのみ偏して其内容の空虚なる事實は目を逐ふて各自に證

明されて居る。又試に之を社會の狀態や人心の道義的健康狀態に就いて仔細に點検し來らば、何者も其事實の炳焉たるを看取するに容易な事だらう。予は社會改造の時代狀態や、新陳代謝其者に表裏の二途ありとの文明觀を敢て爲す者である。

抑 文明の世は進歩改造にあり、其進歩改造は誰の爲なるか。云はずもがな人間夫れ自身の爲に外ならず。然るに其の中心たる人間其者に至りては毫も改造せられず自家頭上の問題を忘却するの弱點あるは何事であらうか。社會の所有方面に亘りては、醫界に政界に劇界に又は、藝術美術等の學術的考究に、或は航海航空は思か總ての交通機關に關し、事々物々が現在斯くの如き改良進歩を表示しつゝあるに方り、夫れ自身即ち精神的改造を措いて問はざるが如きは之を可とすべき事に非ずと予は思ふ。現に宣傳せられつゝある主張も主義も學說も亦是學校教育も家庭教育も社會教育も不可には非ざれども、只人心動搖の結果が流行に連れて種々の新名目の下に會合なり結社なり集團なりを起滅興亡するに過ぎずして、人心統一とか何とか

主唱すと雖も其所に何等の精神的眞の文明、確固たる精心の發露を見ぬは吾等宗教者の歎息措く能はざる所である。昨年一月十二日帝大八角堂に於て初講義をした獨逸より歸朝の上杉愼吉博士が『學問するよりも先づ人物を作れ』と皮肉つた此の一語は、確に眞の精神的文明を意味した言句だらうと深く予は此の言葉に共鳴した。彼等が徒に外來思想の文明に心酔中毒しつゝ、夫れ自身の改造問題を忘却し枝葉の輕佻的進歩にのみ腐心する所謂識者なる者の行爲たるや、吾國の文明其者の眞精神とは遠之遠之である。況んや物質的文明の光景は現に殆んど其極に達せんとしつゝあるに反し、精神思想界の文明は空虚にして且つ、人間の病的傾向を示す事の著しき現代に於ておやだ。世の獸的文明を謳歌する或一派の識者や國家社會を口癖に擔ぎ廻る經世政治家や、解脱立命を説きて人生問題に生くる宗教家や又は、原子が怎の分子が怎のと顯微鏡下のみに没頭する學者殿も亦大いに、等閑に附すべからざる好箇の研究の適材料だらうと思ふ。是れ人間が先天的の大使命、換言せば理想上

の眞文明を現實上に儼乎として莊嚴たらしむる當然の努力であらねばならぬからである。如上は唯子が思ふ處の文明の意義を一言し以て、將に來らんとする是が新傾向を絮説したるに過ぎぬけれども、更に項を改め時代思潮の概見を述ぶる事としやう。

## 現代學生の心理如何

世人の常に云ふ所を聞くに戦争の後には必ず道德腐敗し犯罪者の増加を見るとき云ふ。成程世界動亂の餘波を受けた我が社會刻下の状態を観るに、人民公選の代議士は勿論公官衙に職を奉ずる御歴々方から、教育に一身を委ぬる者迄が。隠れたる不道德位ならまだしも法律上の罪科を公然として犯すのだから驚くべき事である。かゝる事實は戦争のみに原因を歸すべきでない。理由は明白である。其原因たるや第一に宗教の衰頹、教育方針の錯誤、浮薄墮弱の藝術の流行等數へれば無限だが、之等が其大半を占むるだらう。自己の道德を紊亂し社會の風紀を毀損する者は自己自

滅を免かれずとは雖も斯んな徒輩が、日々續出するごせば國家的由々敷大問題と云はねばならぬし、軍備を如何に擴張しても縮少しても夫れは第二の問題で古來國家の隆盛を計らんとせば先づ道德的信念を鞏固ならしめねばならぬ。現代の如く社會上行政上道德も衰頹し信念も微弱であつて、之れが覺醒の機來らずとせば實に國家の前途たるや危険至極であると言はねばならぬ。

又或人は謂はん。教育は盛に發達し宗教は内觀的に活動しつゝあるに非ずやと是れ果して然る乎否や。予は直に之を認識する事も出來ぬが、然らずとの反語を發する程の事實も茲に特筆する事が出來ぬけれども、或程教育の發達は個人の自意識を覺醒せしめ、權利義務の思想を養成し以て人格の發展上に資したものと認め得らるゝが。而し必ずしも樂觀する程の功程には行つてゐぬだらうと思はれる。何故なれば現代學生の心理を窺へば實に寒心に堪えぬ様な事實が、目の當り目撃されて居るのではないか『何故に親に孝を盡さねばならぬ義務があるだらうか』我輩には神佛

を拜すると云ふ義務は持たぬ』等と云ふ非國民あり。社前に合掌する同窓を嘲り笑ふ而も某大學生を予は或神苑で發見した事さへあつた。概して神經衰弱に罹りて社會に活動も出來ざる病的者流のみ多く、徒に雜誌新聞の成功立志者に欺かれて物質的功利主義の擒となり、生活問題に腐心し經濟的無常觀に煩悶し、果ては自然を渴仰する詩人的冥想に耽り、所謂誇大妄想の狂人と化し現實界を魔界視する底の愚者を以て満たされつゝあるのである。殊に女子教育の如きは肝要なる良妻賢母主義はそつちのけ唯譯もなく白襟紋付きや流行揃へに盛装しつゝやれ女權擴張のやれ慈善救濟事業のやれ新眞婦人會の（婦人參政權は暫く別として）と騒ぎ廻るお轉婆に非ざれば、博士や學士や藝術家や或は詩人や文士や人爵や成金輩の前に節操を抛ちて盲従する風船式部のみ續出し、本來特有の女性を破壊し無止みに獨身生活の何の絶叫して男性がつて居るが如き、敢て罪を社會に強ふる勿れだ。時代の弱點を批判して他人の兒を賊せざるべく教化するが、抑も教育者の天職ではあるまいか。

## 未來往生と現在成佛

進んで宗教界の内觀を一瞥せば是れも亦遺憾ながら共鳴の出來能はぬ點がある。例へば彼の自然主義の社會に唱道せらるゝや、宗教家の大多數が同主義を指してお掌の中の解脱主義となし、時代思潮に迎合せんと力むと同時に、他方には其れに伴ふ惡思潮を排斥して所謂時代の煩悶を根本に救濟せん爲め、勢ひ境遇上文藝的に宗教本來の精神を宣傳するの餘儀なきに至つたので、其結果も亦自然主義の如き自覺を世上に認識せしめたのである。然れ共宗教本來の大理想を撥開して之を現實化せしめ、而して之に依り一代の人心を指導しやうとするには、宗教者自身が客觀的に宗教的效果を得ようとするよりも寧ろ、主觀的に夫れ自身が時代思潮の策勵に由りて、深刻なる内觀自省を爲すが適當であらう。即ちより以上の大乗的現實の安心立命を以て、時代に伴ふ手段方法を講じて社會人心の教化に努めねばならぬ。而して又時代の進歩と社會の改造とに依り、世人の漸次渴仰しつゝあるは、同じ宗教中

でも小乗より大乘的に傾倒しつゝある目下の状態である。然らば此の大乘的現實の安心立命は誰に依て展開せらるゝか。抑も此の時代思潮の渦中に儼然屹立して彼等に安住の靈糧を與ふるに足るべき宗教は何か。試みに謂はん現代の社會的生活には實に強堅な意志の力が肝要である。若し此の意力なかりせば——太平の夢を貪る太古の時代は姑く措きて——激烈な現代の生存競争場裡から退却して終はねばならぬ。苟も此の活社會に押しも押されもせず自己の本領を發揮して行かうとする者は、剛健なるエネルギーを涵養して合理的現代化の健全な宗教を獲得把住せねばならぬ。或人曰く『他力宗は餘りに厭世主義ではないか』『基督教は餘りに薄紙的ではないか』と而して『禪宗は全く修養的現代の宗教です』と此の數言果して合致せりや否やはなかく一朝一夕の問題ではないが、兎に角他力宗だからとても此頃に至つては何時彼も、厭世主義許り唱導はせまいし又、外見薄紙の様な基督教でも、其の教理の奥底に到らば他力は他力でも、現代の思潮家に適する所があるに相違ない。

い。禪宗だつて完全無缺な現代の宗教と許りも云ひ得ない。身は禪宗僧侶でありながら、他力本願を渴仰して居る人さへあるのだから……宗教の價値は信する人に依りて認め得らるゝものなれど、結局未來往生主義の他力宗と、現在成佛主義の自力宗との區別に依りて、時代の推移と人心の動搖とが勢ひ現在觀念を欲求する様になつて來たのである。即ち現在主義の下に自修精勵しつゝある大乘的宗教に依つて、自己本來の心性を徹見し、其の徹見し得たる金剛不壞の信念を以て、靈的生活に生き是を背景として現實の社會陣頭に活躍を試むべきである。此の大乘現實的宗教を予は只管吾禪宗に架するもので、禪宗は實に彼等の欲求をして形式的でなく、眞箇に充實さすべき宗教、彼の徒に神を呼び説教を聴聞し救ひを叫びて未來永劫の極樂淨土を希ふのではない。禪宗特長の立場が現代の使命を帯びて、向上思想界に躍如として揚り現下精神界の渴望せる現實主義の安心立命を彼に與へしむるものである事は茲に斷言して罷まぬのである。

日本基督教徒目下の状態

讀者よ!! 敢て禪宗の教理如何を問ふ事を待てよ!! 人生の眞意義は山林静寂の裡にあるのでなくて、市井喧騒の表にいつもあるのだ。安心立命の信條は黄卷朱軸の中に伏在するものでなくして、却つて人の脚跟下に充滿して居る。人情の妙諦は竹帛の上に現はれずして寧ろ匹夫野人の訛語に於て親まるゝものである。世人は漫然無學者となつて人生を無意識視するよりは、須く無學の學者となつて人生觀を思考するに若くはない。然るに身は金殿珠閣に坐して、徒に心外の光明に眩惑し長者の家の兒に生れて貧困を呼んで居るのは正しく是れ自修精勵の如何に基因するのである。

若し此の奮闘的社會に臨み永遠の勝利者たらんとせば、情をして制御の圈内に留まらしめ智をして賢實に發達せしめ、意をして精神の全形を統一せしむるが肝要と思ふ。加ふるに迷悟の兩境に横はる一條の葛藤を截斷して、我執着迷妄の悶苦を排

脱したならば窮境に慰安の光明を認め、活社會に活躍を展開し、動處に静を得、静處に動を得、精神界は大安樂自在大平安なるを得るであらう。即ち禪宗のみ彼等の欲求を充たすに足らざる未來往生主義に非ずして現在成佛主義であると予は深く信するものである——と云ふて予は彼の基督教や淨土教の如き他力的宗教を絶對不可なりと云ふ意味は持たぬが、兎に角單に現代の如き思潮の渦中に巍然として佇立し、當代の世道人心を風靡する底の活力ある點に於いて、唯吾宗を擧げたまでに過ぎぬ。茲に思ひ出したる基督教現今の状態に就きて一二の批判を試みて見やう。

實際現今の基督教徒は動もすれば其精神動搖し彼方に迷ひ此方に惑ふの感がある。曰く廢娼曰く禁酒曰く婦人矯風曰く女權擴張曰く男女同權!! 是れ其名誠に美なりと雖も其實亦之れに伴ふや否やは頗る疑問に堪えぬ。右の諸問題は急ち天國より降り來るか又忽ち造化神の使命か、耶穌教以外には此の主義を持たぬかの如く自惚れ自家頭上の素行を顧みず、是を以て利己の方針目的とし、且つは是れを以て弘教の

大方便かの如く慧々猾々社會を籠絡し去らんと、努力奔走にのみあせりつゝあるは日本基督教徒目下の運動状態ではあるまいか。前述せし如く只濁沼汚水が風の爲に波紋を生じたるまでの事にて、やはり濁沼は濁沼汚水は汚水のみだ。眞の會改造時代とも云はれずと予は思ふのである。元來基督教の傳統的氣相が果して禪宗の所謂直指人心見性成佛、の如き父子不傳の大精神を有し居るか。又此の大精神を直觀すべき自修精勵底の何物かを具し居るや否やと、予は未來往生觀の基督教徒に問ふであらう。即ち神と呼び父と呼び天國を指して徒に憧憬欣慕し、助け給ひ救ひ給ひと悶絶してバイブル一冊の頁に頭出頭没して自ら得たりと信ずるに留まるだらうと予は茲に斯う披歴して置かう。

家庭的宗教と社會的宗教

如上是を要するに小乗他力的宗教は家庭女性的宗教と見做し、大乘自力的宗教は社會男性的宗教と見做して差支あるまい。何故なれば前者は餘りに現實の事象を忘

却し到底活社會の精神界を風靡して、此の亂脈たる渦中に立つて現在に成すべき活動のエネルギーに乏しいと同時に、後者は形而上にも形而下にも徹上徹下、到所に活躍を現じて且つ靈効あり眞に精神的現在成佛主義であるから……謂はば前者は妻君的宗教後者は良夫的宗教とすれば解り易い。此の關係は恰も車の兩輪か鳥の兩翼に等しきに似て、予は敢て前者を無能力な不必要なものとはせざれども、妻君は妻君の天賦を完全ならしめ良夫は良夫の行履を守らしめたいと思ふ。必ず妻君をして良夫の領域に働かしむると同時に良夫をして妻君の牙城に切り込ましめてはならぬ若し此の倫理的夫婦關係が主客顛倒したる場合は、家庭平和の團樂は根本より瓦解され結果滅亡の累卵は免れまい。想ふに從來社會一般の傾向は妻君的宗教をして良夫的宗教の代理行爲を執行せしめて、而も其の説教に耳朵を傾倒しつゝあつたければ共鳴の餘地を見ぬであらう。予は自畫自贊式の排他的見地を敢て陳述する者では

無いが、女性家庭妻君的の他力宗教が、男性社會良夫的の自力宗教の内助に努力するのが、常に現代のみならず永遠に於ける一法則であるからである。是れ又兩宗教の根本義だからである。是れ予が世人の渴望する大乘的現實主義の安心立命を興ふる禪的思想が樞要であるを信するからである。

### 禪三派目下の趨勢

然れども禪的思想が現代思潮に合理であり且つ適當である事は如上の表白で領解されたとしても、果して現今流布せられて居る禪三派の趨勢が社會男性良夫的大精神が、社會國家の爲に重大なる貢獻を發揮して居るだらうか。禪宗三派が臨濟曹洞黃檗には分れて居るにしても、等しく自力的現代宗教であらねばならぬ以上は現代思潮を風靡さすべき勢力がなくてはならぬ。禪宗僧侶は勿論なれど其れく有する寺院の僧徒なり信徒なりが、多少世を化導する丈の能力を有するや否やだ。先づ東奔西走毫も寧日なく宗の爲め、社會の爲め、禪的思想を鼓吹して現今の思潮

界を歎き、教理道義の宣傳に純粹せらるゝ僧侶諸徳は未だく指を屈する程より無い。禪宗信者と稱する居士とか大姉とか申さるゝ方とてやはり然りだ。

總て方便は或目的に至る迄の手段に過ぎぬ。予は方便を以て目的視する者では無いと同時に、社會現代の思潮紊亂に當り、之を教化せんとするには宜しく方便も可なり手段も可なり、因縁説も可なり地獄極樂説（機に依つて）も可なり、道徳も倫理も修業も總て、説き盡せる丈説き盡し語り得られる丈け語り得て、以て最後に禪的思想の目的地に達せしむるの方法が、予等宗教者としての立場と思ふのである。近時起る僧侶參政權獲得運動とか云ふ問題が、何宗何派の人の發案かは知らねども是れ等の問題を肯定すると否とは、大いに熟慮を要する事である。夫れよりも、一方現代思潮の紊亂を鎮撫して以て吾が良夫的思想の宣傳に努むるが、焦眉の急ではあるまいか。茲に於て法の爲め世の爲めに活動する道俗には相互間共に、大いに、贊助隨喜の涙が欲しい。人の事業計畫（勿論社會奉仕と見做したるもの）を援助贊助



して且つ喜びの心を以て、其人を迎ふるの功德は萬金にも換へ難き事と思ふ。  
讀者諸賢よ!! 予は宗教の如何を問ふよりも他の非を知らんと欲するよりも先づ  
吾人が信ずる宗教の立場より、現實的思想を喚起して現代社會に漲る數多の悪思潮  
を擺排し以て人心の安定を計り社會の動搖を靜寂ならしめん事を永久に祈る者であ  
る。

### 所謂治者と被治者 (上)

#### きまり切つた相場

どうせ予は坊主なれば、治者と云つても被治者と云つても其結局は、やはり宗教  
的立却地に舞ひ戻り、得意の場合も失意の場合も我田引水には非ざれ共、其到着點  
がやはり宗教的墜在を免れまいと思ふ。又無論其積りである。物に需要あれば供給  
あり、賣手があれば買手がある。教ゆる者があれば教えられる者があると同じく、  
團體的社會の上共同的生活の上には必ず、或者は治者である又或者は被治者であ  
らねばならぬ。是は今始まつた事ではなく名稱こそ種々異類はあるけれ共、君と臣、  
親と子、賓と主彼れと此れ、總て相對より成立つて居る事は明かな事實に相違ない。  
従つて貴賤と云ひ貧富と云ひ、老若男女賢愚凡聖、仔細に是を點檢し來らば實に  
複雑を極むのであらう。有る者は無き者に與へ、無き者は有る者に求め、強者は弱

者を助け弱者は強者に助けを求むと云ふ位な事は、定り切つた相場であるから、知る者は知らざる者に教へ、知らざる者は知る者に習ふと云ふ事が、社會相互の生存在に於ける一原則の様にも思はれる。三人行けば必ず吾師ありで、此小なき所が幾ら先天的に利溲であり且つ又明敏であり緻密であるとした所で、農業工業商業は勿論政治でもよし宗教でもよし、加之哲學もよし科學もよしと云ふて、大工もやれば左官もやる紙屑買もやれば犬殺しもやると云つた様な、云はゞ萬能主義で八方美人の一人芝居を演らうと云ふ事は到底不可能な話で、木に依つて魚を求むるの愚論に終るより仕方がない。一つの芝居を見ても然うである。丸橋忠彌もやれば伊豆守もやる、弓師藤四郎もやれば捕手の役もつとむるなどは、たゞへ早變り十八番の右衛次や延若が出て來ても到底出來難からう。此れが其れ／＼役に依り分業法に依つてこそ初めて掘端より召捕迄の幕が完全するので各々、相勤むべき一々の役あればこそ其本務も遂行し得らるゝものである。やはり一座には座長なり補導なりがあつて

教ゆるに依り、之を習ふ大勢の役者もあると云ふ。第三者側から見れば丁度社會の現象は、一つの、劇を見物して居る様なもので其理に至つては或は少しも變らぬ所謂治者あつて被治者あり、被治者あつて治者あるのである。俗諺に斯んな言葉がある。即ち

縁なき衆生は度し難し

是は何も坊さんが一切衆生を濟度する事にばかりに使はずとも、氣の無い者には教へても駄目だと云つて、氣のある方面に依つて研究もさせ修業もさせたなら、其方面に依つて教ゆる者は之れに教へ、習ふ者は之に依つて習ふべしだ。概して茲に取り出した表題の治者と被治者とは、何を意味して居るであらうか。即ち治むる者と治めらるゝ者と云ふに過ぎない。法律は治者で社會は被治者で、道德は治者で人類は被治者、學校の教師は治者で生徒は被治者、宗教は治者で信仰家は被治者に類し、又之を大きく云へば政治家宗教家教育家等は治者に屬し、農工業或は商業家よ

縁なき衆生は度し難し

り其他の服業者は被治者に屬するとまあ茲では云ふ。之を稍理屈的に云はゞ治者は精神的より、被治者は物質的より相互に關聯して行くべきもので實に密接な間柄なのである。そこで治者も被治者も國家の爲め社會の爲めに、大なる貢獻を……と云ふ所から見れば、治者は精神的勞働者、被治者は物質的勞働者と眺め、何れも勞働者には相違ないと云ふ事が云ひ得らるゝであらう。勞働は神聖なりと云ふ言葉も予に云はしめば、勞働其物の勞働でなくして勞働外の勞働ではあるまいかと推知せらる。社會に生存して居る以上は老も若も男も女も、貴賤貧富共に一種の勞働中に生存して居ると見ても、決して予には謬見でなからうかと思はれる。

而し一般の解釋から云へば、手に鋤鎌をもち額に汗して働くを勞働とし、終日終夜手足に依つて服業者を勞働とのみ考へ得るけれ共、是は少しく偏見ではなからうか。政治家として教育家として或は宗教家として、からだこそは使役せずとも其腦力を働かす上から言へば、又勞働者と云はねばならない。

社會の事が分擔事業である丈けに人の爲して居る事は皆樂そうに見える。身には綾羅錦繡を着けて、出づるに輕裘を纏ひ肥馬に鞭ち、入りては虎皮を舖きて座褥となし、金殿玉樓にでも住する人を見れば他は必ず是を羨望視するであらう。而し其の御本人になつて見れば人知れず頭を使ひ（たとへ自己利の爲にしる）精神的苦痛に惱殺されて如何に憂きことの多かるやは、計り知れぬのである。統治者たる一家一村一町の長より各郡各縣の長に至るまで、治むる者の身にとりては猶更然り教育家法律家宗教家亦然りと云ふべきである。却て精神的に身を苦しめらる所謂治者なる側からは、よし糲粥を啜り蔽衣を纏ふとも、茅屋破れて雨露壘を濡し壁は破れて凄風骨を露すの住むをしても、腦力を使役せざる且つ責任とても重からざる被治者にあるを好み、閑日月の自然の大靈に接するを欲するのである。兎角岡目入もくで眺むるのが社會人類間の情態で、精神的勞働者（勞働の文）側よりは筋力を使ふ所謂被治者の物質的勞働者を樂なりとし、被治者側よりは治者に立つ所謂肥馬輕裘の人

縁なき衆生は度し難し

を樂だとする。無論人間の欲望は樂を好み美を好むのだから止むを得ざる理窟なれど、そんなら治者が被治者になり、被治者が治者になり得たとせば如何。到底永續きはせずホンの只一時的的好奇心に驅られたる、寧ろ滑稽的現象を見るであらう。そこで予は斯う云ふ事を今思ひ出した。即ち精神的も物質的も治者も被治者も等しく皆、食ふが爲とか着るが爲とか或は住するが爲とか、斯んな事は第二に置いて先づ國家隆盛の爲に、或は社會發展の爲に……と云ふ定義からは、何も彼も勞働と云ふ權限内に入つて終ふと同時に、治者は或點に於て被治者を兼ね、被治者は或點に於て治者たるを免れぬは事實であると云ふ事を——成る程然うであらう。宗教政治教育に身を籍く人は實業側より知らざるを學びて參考の資料にも供すべく、又實業家方面（一般を指して敢て）の側からは其の精神的向上の路を、宗教家に求めて複雑なる俗塵を拂ひ、清淨幽雅なる精神の慰安を求め、或は政治家法律家に依つて安寧秩序を得て無事なるを得るであらう。

茲に到つて初めて「人を治むる者は人に養はるる人に治めらるる者は、人を養ふ」と云ふ言葉が出て來もし又意味も其れに近づいて來る。換言せば實業家は物質的に人を助け、治者たる人は精神的に人を助くると云ひ得べく、人に施すに精神を以てし或は物質を以てすと云ふ事に歸着する故、報恩酬徳の觀念は實に社會共同生活上に於ける、一大根本義であらねばならず、國家社會に貢獻するに精神的勞力を費すのと、物質的勞力を費すのとの二つに分けたならば、兩者共密接なる關係ある事は言を俟たない。昔からいふことなれども、

枯木も山の賑ひ哉

と、成程それも然う思へば思はれる。而し夏になれば縮入や袷は無用なれど、冬になつてから單衣にバナマ帽子や、浴衣に兵子帯ちやあ寒くて堪らぬ。君の御馬前に劍を振つて戰ふ時は勿論、其鞘は山の枯木と同じて別段入用でもないが、彼我講和の曉に刀を納むる場合何處に納むるか、馬は厩に籠は籠に、刀はやはり元の鞘に納

めずばなるまい。此の枯木の言葉は稍輕視の意味で云ふたものらしく思はれる。物質的労働者側より見れば米を作り汽車を走らし、石炭を掘り土石を運ぶのに、何の教育家宗教家の入用を感ずや。況んや智識階級の何のと吹けば飛ぶ様な政界の連中に於てをや。枯木の山にある如く只ホンの賑かし位に過ぎない。やれ遊墮の民とか高等遊民とか種々に評するを免れないと同時に、精神的労働者側より云へば、田畑に於ける耕地整理法から交通機關の便宜法から、石炭の用途法土石を使用すべき建築の事より一切の主腦者は茲にありだ。何の無智の民無能の輩が労働主義と云ふても、我等非ざれば其職に就くの途も無き事ならん。而も大正の聖代に其の聖恩を忝ふする事に於ては云々……。」と必ず相反目の情態にあるは事實である。斯うした所より不用の枯木視して結局は、つまらぬ騷動を起して血を見ねば止まぬと云ふ様な、野蠻的地ガネをあらはすに到るのである。

是を一つの田舎路に就いて見ても、例は極卑近にあつて而も其理はよく穿たれて

居る。道路の兩側は田畑あり原野あり、路は人も通れば馬も荷車も皆通る。自動車も悠悠々として往來の出來ると云ふ四間道路、丁度六七月頃とて農家は一番草二番草を取る眞最中、全身泥塗れになつて親子夫婦一家總出で炎天の下に立働いて居る。折しも道路眞中では其修繕をする爲に、道路工夫が玉なす汗を拭くに暇なく手も顔も赤銅色になつて働いて居ると思ふと、彼方よりは滿載の荷車を亭主と覺しき者が曳けば其女房らしき女、背に赤兒を負ふて其の泣く赤兒をすかしつゝ後を押し、夫婦協力して力弱き足を力に、油汗の流るゝに任せ行く此等の背景中に、身には美服を纏ひ逸樂として、而も自動車若しくは人車に乗じて走る人を見れば、果して如何、車上の人は農夫工夫人足を目して無智の労働者!!とは思はざれ共、又現在己れが雇ひし車夫運轉手其者を見ても、無能なる哉労働者!!とは尙感せざることも、彼等の見る此の人に對するの目は何處にありや。此の人果して政治家なるか宗教家なるか、將た教育家か法律家かは暫く措き、此の車上の人は我等に精神的供給を與へて、我等

をして安寧を得せしむるが爲め、且つ精神の慰安を施すが爲に尠からぬ、腦力を費して居る者なり、國家社會の進歩發達も乃至安泰平和も皆、精神的勞力を以て治めらるゝものなれば我等は斯の如くなる人々を助けざるべからず否、感謝の意を表せざるべからず、彼の自動車も人力車も美服も美食も、我等にとりての鋤鍬耕耨、鶴嘴荷車の類と同じく商賣道具なりと、此道路上に於て達觀する者は幾人ぞ、皆無と云つて宜い。其場合直に起る高等遊墮の民？食ひつぶし亡國民？其裏には破壊主義的な一種卑劣極まる心を抱くの輩が多い。誠に失敬千萬な勿體至極も無い事——と云ふよりも其の輩が氣の毒なり。早く此の俗に云ふヒガミ根性を矯正して、車上の人、田夫も運轉手も相互の間に、たとへ何處の馬の骨か知らない人と會遇しても決して違反的な心を起さず無邪氣に、報恩酬徳の觀念こそ肝心ではあるまいかと思ふのである。よし途上にて人と人とが衝き當つても喧嘩争論に迄火花は散らさずとも濟むであらう。

腦力を費す其の人から見れば、假令鋤鍬を持つて泥田の中へ入ることも、鶴嘴を振つて天下に勞働をなすことも、畦を枕に青天井をのぞみ煙らす煙草の一服が、千萬金に價するが如く羨望措く能はぬであらう。最も好奇心に驅られて一寸神經の疲勞せし時の發作的一動作にも依るであらう。れ共、一般から推せば變化を好める理性が其うである。前にも述べた様に、人の仕事に樂に見えたり又は、人の境遇を羨みてそれ相應に、能はざる望みを他に移すと云ふが結局茲に到るのである。成程からだは樂だが精神的には苦しい。吞氣で心を使はぬ代りには手足の勞働が苦しいと云つた様な苦あれば樂。樂あれば苦と、一得一失が天地の原理と思へば諦めもつく。そこで今迄云ふただけでは兩者共勞働と示ふ意味に於て、何れが治者で何れが被治者と了々たる區別はつかなくかつた様だが、つかないのが當然で若しも、此の區別がハッキリついたなら又事は面倒千萬。其れであるから前には治者は被治者たり、被治者は治者たりと云ふた。

食足つて禮節知る

人間萬事食はすには生きて居られぬ。昔から食はずとも生きて居らるれば食はずに濟むが、生物が進化するに云ふのはやはり、食ふ事に始まる。又人間が生れて死ぬ迄の間、或は甲の人が茲に死せば乙の人が彼所に生れる。生滅變遷うつりかはる世の有様、所謂新陳代謝なるもの、起源はやはり此の食ふ事にあるのだ。假りに人間が誰一人食ふ者がなく、世界悉く全滅に歸し、植物も動物も酸炭素の作用が罷み、原始的動物のアーミーバーの類に到る迄、悉く食を断つとしたら如何？ 鑛物の如きも土中に於てなせる種々なる作用なしとせば如何、必ず進化もなければ退化もあるまい、宇宙所有物の變態作用は止まりて、想像すら及ばぬ程な消滅界が現はれるであらう。幸ひ生物には進化作用ありて、進歩もあれば發達もある。まして人間社會に於てをやだ。所が此の問題は異口同音に共鳴されるのだが「人間は何の爲に生きる」何の爲に働く「何の爲に食ふ」——種々な理窟はさておき、予は働く爲に食

ふと答ふるより外に途は無い。食ふ爲に働くといふは合理的にも聞ゆれど、之は餘程考ふべきである。若し食ふ爲に働くならば其日暮しでも結構、食ふて行けさへすれば其れで充分、又いくら辛い仕事も辛くない仕事も心を使つてもからだを使つても、畢竟は食いさへすれば善いのだから、不平を抱いたり人の仕事を羨むには及ばぬ。又より以上の財産も入らなければ慾も從つて出て來ぬ筈だ。斯んな馬鹿げた論をして居たら向上も發展も、乃至は進歩發達の日を見る事も先づ不可能な事。而し食ふ事は又極肝要な事で、食はずに居て働くと云ふても之は無理な事、己れの事業を遂行しよう、成功をしようといふには、是非共食ふて生きねばならぬ。又死に度くない空腹になれば苦しいといふので食を求む。希望もなく餓死しても差支なく所謂睡生夢死を好しとせば、食はずに居るに勝つた事はない。やはり人間の最大の望み、最大の希望は少しでも永く生き度いと云ふ、吾が身體に對する執着心か所有心とでも云ふ一種の慾望なのだ。そして之に就いて廻る向上心と云ふ即ちもう少し

く希望する精神である。西洋の或學者は曰く「希望は精神の食物なり」と。希望と云ふ食物なかりせば、食ふ能はずして餓死すると同じく、精神は其まゝ死に歸して終ふ——と云ふのは無能に了り無智に了るし、希望なきの輩は所謂低脳たるものに等しく、茲に到つて治者もなく又被治者も無いし、無智無能も遊民も墮民も龍蛇混雜クソもミソも一つである。苟も生を得て或事に達する迄は兎も角も、獨立して一家を支ふる上に於て、或職業に従事せば、精神にせよ物質にせよ、社會萬般の中の何たるを問はず、之れに依つて己れの希望に進むならば、貴賤貧富を論ずるに暇があらうか。坊主だらうが神官だらうが、尙百姓も大工も米屋も魚屋も、相撲も俳優も講談師も落語家も、おしなべて天賦の職を全ふせんとする眞聖なる勞働中にあるのだ。

茲に於て「人を治むる者は人に養はれ人を養ふ者は人に治めらる」と云ふ言葉をもち出す必要がある。前に掲げた「食足つて禮節知る」とは茲だ。たとへ如何なる

職にある人でも、食ふが爲には生命を捧げてもやる。支那人等は「金の爲には生命を惜まず」と云ふ話を聞いた事があるが、實際食ふ爲には、悪い事と知りつゝ、泥棒をやる、殺人罪を犯す、火つけ強盜あらゆる罪も皆食の問題より起るので、人窮す——則ち詐るの類に陥る。幾ら一方に於て人倫道德の問題を唱へ、或は教育者の力、宗教家の力、或は政治家の力を借りて、精神的救済をやつて見ても食はずに居ては、仁義も禮智もあつたものに非ず、強者は弱者を苦しめ貴賤と貧富と先づ折合が付かなくなるも道理哉。

食足つて後兵足り民に信あれば國安しと。論語に在る則ち「子貢問政子曰食足兵民信之矣」と。子貢が政を孔子に問ふた時、孔子は第一には食足つて民に日々の生活に憂なからしめ、第二は兵を強くして即ち富國強兵に、第一は内を修め第二は外に備へ、第三には民をして信あらしめよと。此三つを修むれば國家社會は無事平穩であると云はれたが、此第三の民をして信あらしむるが、所謂宗教家教育家等の



所謂治者と被治者  
受持つ所だ。

### 所謂治者と被治者 (下)

金が欲しくば働いてくれ

初めに食足つて禮節を知ると云ふて、若し食ふ能はずば不道徳を敢てして國家社會の紊亂は、到底免れぬと云ふたが、無論謬見では無からう。而し其の食を得る爲めの金、其の金を得る爲めの労働を忘るゝ勿れた。其労働を神聖なりとし社會一般の人悉く、朝は早く夜は遅く寸暇の油断もなく熱心に働かば何ぞ其れ、食に足らざる事があらうぞ。予は思ふ「食の足らざるは無駄費にあり」と敢て金錢其物を浪費するに非ざることも、米一粒に於て随分心當りのある事と思ふ。

「一農耕さざる民之が爲に飢る者あり。一女織らざる民之が爲に寒る者あり」と云ふ管子の詞を見れば猶更労働の肝要なる事が分る。農織に限らず何の職にある者も皆然りと云ふ可きである。

金が欲しくば働いて取れ

一夫は耕し一婦は織りて食の道を求むれども、宗教家は如何にして其食を求むるか？。教育家は教師となりて學生を養成して俸給を貰ふ。政治家は政治に列つて天下の大勢を論じ、或は内閣に或は議會に其の國利民福を圖つて……吾宗の祖百丈禪師は「一日爲さざれば一日食はず」と迄云ふて居られる、……報酬的給與を貰ふ、夫々道はチャンとある。前述した如く政治家とか精神的貢獻ある人とか云はばとも成程政治家だとか教育家だとか云へばサ程にも思はないが、坊主と云ふと如何にも惰民の如くに人は思ふ。何だ坊主が——彼の乞食坊主が——祿な仕事もしないくせに——云々と。此れ何の意味か分らぬ。坊主が此の罵言を受くるには、歴史的何かい原因して居るに違ひないが、所謂手足を勞せざる表面ばかりを見て、樂なもののは坊さん一人と誰云ふとなく喧傳する様になつた事も一つの原因ではなからうかと思ふ。其れに又僧侶一般が今迄は遁世的超越的で、稍もすると默照然と構ひ込んで居たせいも少しはある様に思はれる。又坊主は人から貰つて食ふし施を受けて生きて

居る——と云ふ事が餘程世間の人には深い印象を與へて居る様に思はれる。無論施して貰つて居るに違ひないし、貰つて食ふて居るに違ひないが無爲無能にして貰ひ且つ施さるゝに非ざる事を知つて貰はねばならぬと思ふ。予が始めて僧侶になるとて家を辭する時（無論予は長尾家の相續者だつたからでもあらうが）口實を左右にして予の出家を止むる人の中で「人から物を貰ふて生活するなどは餘り人間として價値がなさ過ぎる。人は働いて食はねばならぬのに施しを受けるとは意氣地の無い程がある毎日通り行く乞食にも劣るべきなり。太閤秀吉は茲に眼を具して出家の勧めを拒絶した爲め、あのやうに成られしに非ずや」等と申されたれ共、鐵石よりも堅き——我意志は之れに屈するともせず、却て其人を哀れむ事甚しかつた位である。云はば僧侶の受くる施しは教員に於ける月給、職工人足に於ける日給、各官員の俸給年給に等しく、或は資産家の財産より生み出す利子と同じく、茲に何等の疑をはさむ餘地も無い所得である。

金が欲しくば働いて取れ

社會と云はなくとも人と人と相集れば、頼む人と頼まれる人が出来るし、使ふ人と使はれる人があらはれる。其場合には必ず報酬と云ふもの、體よく云へば御禮と云ふて、即ち日給月給年俸慰勞金皆悉く其の報酬であると同時に、坊主の受くる布施其他の財物は皆是れ等の意味に受けてよいと思ふ。即ち宗教家は法を人にあたへる。之を法施と云ふて無畏施と云ふのも亦あるが、之は後日に譲り、今は法施を代表的に云ふ事としよう。

前に一寸申しかけたが、食足り兵足り民をして信ならしむと云ふ事。之は一例に過ぎぬけれ共、人々をして堅實なる精神を養成せしめ、神聖なる勞働中に生かしめ信誠なる而も篤厚なる精神を充分に養はしむるは誰ぞと問へば、所謂治者側の人、其中にても宗教家に非ざれば他に無けん子は信するのである。只單に道德思想のみならず人生の大問題たる生死、安心立命に致つては之を宗教家に問はずして誰に問ふか。世には哲學者あり。倫理學者心理學者ありて、論を深淺粗細に亘つて説き

盡せども生死岸頭の話に到らば、如何に説破するやは知らざれど、やはり宗教家は宗教家らしき説法するが爲め、聽法底の人亦宗教的觀念を以て之を聽きて初めて一種云ひ能はざる所感もあれば安心も得られると云ふ。そこで民をして信ならしむるに依り、社會の改善も出来よう。相互に於ける共同生存もうまく行くだらうと感ずるのである。

天下は廻り持ち

「使ふのは使はるゝなり」と云ふ論法から云ふときは、使はるゝは使ふなりとも云ひ得られる。人が牛馬を使つて命に服せざれば之を叱咤鞭撻するので牛馬から云へば唯命之れ従ふて成程其場は、柔順に使はれるけれ共、牛馬其れ自身は居ながらにして食ふ事が出来ること云ふ。つまり是は馬や牛を使ふ者が、食物を運んで牛馬に與へる。牛馬の方から云へば人を使つて食物を運ばしめたのと、少しも變りは無い。云はゞ牛馬を使ふ人間が、却て牛馬の爲に使はれた事になる。物は解釋のしやうで

牛馬からは食を與へらるゝ爲の報恩、報酬が其勞力となりて現はれ、人間は又其勞力に對して牛馬其物に食を與へてやると云つた様な調子である。例は唯牛馬と人間にあるけれ共、萬事が是れから割り出される。人に頼む事も解釋のしように依つては其の人をうまく使つたとも云ひ得るだらうしおだて、使つたとも云はれ様なれ共、其の露骨過ぎては兎角感情動物と俗稱されてる人間仲間には一寸都合が悪るからう。又使はるゝ方から云ふても、何頼まれたからと云へば體裁もよけれ共、報酬を得る爲めに……幾らかの賞與がある爲めに……と是れに依る行爲すべての事を露骨にして終つては、一向に人と人との間が殺風景すぎる。最も此頃の様に賃金問題の蜂起時代には僧侶でも御布施の請求がし度い程に思はれるが、治者仲間の中から僧侶を除いたら他は悉く、報酬請求の時代と云ふてもよからう。其れであるから教員の増俸問題、職工の給料問題さては社會改造運動とか、勞働時間問題などの叫聲が各地に起る様になる。物價騰貴の今日從前通りの給料ではやり切れぬと是れ然

り、「給料も増加せずに勞働のみやらすとは全然冷酷的だそんなら働く時間の制限をして貰ひ度い」是亦然りだ。一番分り易いのが銀行とか會社に就いて見る例だ。上役に居る頭取其他は下役を追ひ使ふ。又使つて貰はねば食ふに困るし、俸給を奪はれると云ふ制裁があるから従ひもする。又従はず事も出来る。が而し其の制裁を恃んで自ら安閑として安樂椅子に坐り込み、唯人を使ふて濟むと思ふは大間違ひ、成る程重役に居る者は比較的財産あり能力あり、横柄に使ひ廻はされても事務はごうか斯うか片附いても行かうけれ共、片務的では眞の發展を見る事は少し難い。會社なり銀行なりの發展を見んとするなら皆精一杯に働く。治者に立つ上役も、被治者に立つ下役も共同作業だ。人を使ふのでなく人に頼むと云ふ觀念でやれば、被治者の反抗心も無くなるだらう。命するよりも頼む方が効果多しとする。下手に出で、頼むが爲に被治者側から輕蔑せらるゝ様な者なら到底先きの知れた人物なれば別に論及には及ばない。銀行會社は勿論萬般に於いて治者に立つべき、所有精神勞働者

は決して空威張は無用だ。頭取や社長が睥で指圖して空威張するやうでは其事業は日に／＼衰ふるばかりである。相場は治者が上役被治者が下役と定まつてる。而し上役だから下役の事には手を出さずに居つては又駄目だ。それと云ふて下役もやはり上役の氣を呑込んで居なければならぬ。家の主人公、或は頭取社長、村長、郡長、町長市長其他所有無資産智識階級の人々、巡查教員に到る皆治者であつて、被治者と云へば資本家に對する勞働者、人間に對する牛馬(只一例に)法律に對する社會と云つた様な、云はゞ被使用方面の者を指して多く言ひ做されてある。而し、使ふ人治者も使はれる人被治者も人と牛馬との例に依りて幾分其所の意志疎通が肝心なりと思ふ。使つたり使はれたり治めたり治められたりするので社會問題に一の興味が湧いて來る。其所で共同心とか、報恩道德の念が起る。天下は兎角廻りもちだ。善い種を蒔いて置けば決つと善い實がなる。佛教の因果説と云ふと直に古臭く考へるのは間違ひではなからうか。佛教で説くのは決して死んで先きの事のみならず。現在生存

中に此理の現前して居る事を知らしめて居るのである。

話は一寸前に戻つて「人を治むるものは人に養はる」で、治者は被治者を治むるし又、使ひもし頼みもする其の爲に、被治者は生活を立つて行くので、被治者側は其の又報酬報恩的に勞働に精勵する。其勞働に對しては其治者側から増俸もあるし賞與もあるとしたもので、治者被治者の間は圓滿なる解決がついて行く。金を出して米を買へば米屋も利益買手も便利、若し一再需要者に對して供給者が斷乎たる拒絶態度に出たらば随分困る事がある。東京市中丈でも誰一人電車に乗らなかつたら社會社はつぶれる。電車が無かつたら市中の人は困ると云ふので相互の關係が結ばれて居る。それに何ぞ「客に對する車掌の無禮はと怒る人もあれば」「電車に乗せて貰つて何たる失敬な奴がと云ふ車掌あり」何れも取るに足らざる輩なり。乗せてやると云へば車掌が治者、乗つてやると云へば客が治者、米を買つて貰ふと云へば米屋は被治者で、賣つてやると云へば買手が被治者になる。

嘗て福澤諭吉先生が『人生は芝居の如し。上手な俳優が乞食になる事もあれば、大根俳優が殿様になる事もある。とかく一生を重く見ず捨て身になつて何事も一心にすべし』と云ふて居られるが、實に穿つた言葉である。賣手も買手も威張らず高ぶらず、治者も被治者も政治家も教育家も、一つになつて國利民福を主として、精神的肉體的兩勞働に生きねばならぬ。茲に到つて宗教家は如何に處すべきであるか？。

苦しい時の神だのみ

人間誰しもの慾でもあり希望でもあるが、家内安全無事息災商買繁昌災厄除滅おまけに夫婦仲がよくなる様に一人息子の事故に今度の試験には、必ずく及第する様、米が安くなる様に夫の月給が來月から上る様に……なんて「若き女の願がけるのは神や佛もおかしかる」だ。一錢か五厘位の賽錢で此んなにいろく願が届くなら、醫者も藥も入つたものに非ず。さてく神様や佛様は便利で且つありがたい

と勝手な熱を吹く人も随分ある様だが、其のありがたい神や佛を御守りする、神官僧侶に對する信仰と云ふものが誠に薄い。寺の前を通るにしても社の前を通るにしても、頭一つさげる人はなからう。まづ山門鳥居をくゞつて、手を合はせて拜む時は必ず「苦しい時の神だのみで豫想にもつかぬドエライ願がけお百度参りとか、斷食の願がけ皆此の類、いざと云ふと何だか分らぬ坊さんの所へ神主の所へ走つて行く。まづたよりとするのは苦しい時ばかり、平生は知らぬ顔の半兵衛で居る。物價騰貴とか何とか云ふ此頃は、尙更そうである。祈禱をたのみ讀經を頼む時は被治者となつても、神燈料や御香料を包む時は治者のつもりで居る人も少なくない。賣手と買手、車掌と乗客との例から云へば、宗教家も信者もいろくになる筈だが、治者の内でも宗教家は全然別物でなければならぬ。布施や財施を得るが爲に説法したり讀經したり、人を導くのではない。食ふが爲め金錢を得るが爲に、神佛に仕へて大道神靈を宣傳するのでない。苟くも宗教家たる以上は、物質的慾望に重き

苦しい時の神だのみ

を置く事を嘉とせざるが當然で、眞の治者たる宗教者より布施の請求をする事あつては其の面目は墮在々々だ。最も神殿本堂の雨もりを防ぐ爲の工事費用を、信者有志者に仰ぐは別なれど……。而し其の神官僧侶が日に三度の食を得難き程になれば、續く限り今度は物質的肉體の勞働を爲すより仕方なし。又食ふに餘裕あるとしても、金溜主義に幾何かの財産を得たい（之が寺の資本財産）と思へば人知れず何か、所謂内職的な仕事が必要になる。蠶業をやるとか教員になるとか、又は自ら農業をやるとか養蜂事業とか随分仕事はある。而し檀家側所謂被治者の方から見れば、吾が本寺の大和尚様に田を耕させては相濟まぬと、之を助け寺を護るに至つて初めて僧侶の生活が樂になる。まづ宗教に身を籍く者は、まかり間違へば歸俗せぬ限り、死を前に置くの覺悟が大事である。たとへ人を治むる者は人に養はると云つた所で、養つて呉れると思つた人が養はなんだり、それこそお経もいらぬ説教もいらぬ祈禱もいらぬと云ひ、殆んど坊主神官排斥論が蜂起したら、治者と云つて被治者に對する事も

出來ない。勿論勞働給與問題的な事もやれまいし餘程、此所の具合を考へねばならないと思ふ。どうしても宗教家は生存をつゞけて居る間人道の上に立つては敬神愛國の大精神を傳承し、社會に立つては修養道徳の精神を鼓吹せねばならぬ。又神佛禮拜、供養讚歎も是非なくてはならぬ。要するにいろ／＼な持廻つた理屈はさて置き、一錢や五厘の賽錢で人事に及ぼす、而も苦しい時の願がけは、餘りやす過ぎはせまいか。之れで宗教家に勞働問題の起らぬが不思議千萬。

はたで見て居る籠の鳥

肉體的勞働者とは違つて、自ら聲を大にして生活の壓迫を訴へようと思ふ治者側に立つたに、何時も犠牲的に生活を送つて居る精神的勞働者中、銀行員會社員教員併俊の類は暫く措き、宗教家が今最も其局に當つて居るらしい傾向である。最初に申上げた如く、我田引水に非ざれ共實際の所を云へば、所分中には酷いのである。而し自分の家の醜きを棚に上げて他の家醜を擧げるでもないが、同じ宗教家中で神官

はたで見て居る籠の鳥

の實生活を申上げて見たい。實に其れは驚くべき現象があるんだから。まるで「鳴いて居るのを面白そうに、はたで見て居る籠の鳥」だ。最も鳴くにも嬉しく鳴くのと、苦しくなくのと、又は人を呼び友を呼ぶ爲に、或は愛嬌に鳴く場合もあるそうだが、元來が自然に双翼で天空を翔ぶに適して居る鳥が、小さい一尺乃至二尺計りの籠へ入れられては、不平の上もない事はおきまりだ。其の苦しがつてる籠の鳥を、面白おかしくはたで見て居る様な有様は、世間の多くが宗教家を見るのと似ては居ないか知らん。先づ神官の生活状態だが、我國古來からの敬神愛國祖先崇拜の大精神を傳承して吾國民性を、善導するの任に在る所謂治者の位置にある神職を目して、徒らに悠長な生活を送つて居る者の如く、世間一般は考へて居る。併し之は實に誤れ。觀察で、表面高級な智識階級の如く見られる神職の、内實的生活上の如何に低下しあるかは、社會問題の一として一考を要するのである。とてもはたで見ては居られぬのである。某社司の話に依れば「如何に體裁を作り威儀を整へて

居ても實際の所神官の生活は電車の車掌にも劣る。東京でも三百六十餘員の神官中、月三十五圓以上の俸給にある者は三分の一もないと云つて差支なし。泥んや年に千圓の報酬を受けて居る者は一人も無い。三多摩地方へ行くと、月十圓位更に東北地方では月六圓位に其日を送る神職がある。然し全體から見れば是等の神官が大多數を占めて居る。神官は氏子に依つて保護される外はない。従つて貧乏な氏子を持ち、教養の無い神官は勢ひ、自分から肥料を弄し乍ら田畑を耕すとか、中には船頭迄して僅かな収入を得る有様、中には學校の教師、役場の書記などを適當な内職として居る連中もある（まあ御僧侶の中にも随分斯んなのがありませう）此窮狀で其筋から受付ける費用はと云へば、年三回の新嘗祭費新年祭費例祭費を數へるに過ぎず、府社三十一圓郷社十八圓、村社十四圓を、地方行政官より贈られるに過ぎないのだから心細い。それに神職は服装として、衣冠、齋服、狩衣、淨衣の四種を備へねばならず、大戦以前廿圓で出來た品が今は五十圓もすると云ふので、到底服



装全部が整はず、淨衣で神葬の式に列すると云ふ有様今日の所、神官位生活上窮迫を告げて居るものは無い」と云ふ事であるが、僧侶社會だつて或所は斯んな所もないでもない。昔から坊主になれば食ひつばづしは無いと云ふて居るが、今日ではなか／＼食ひつばづしがあるので、中にはごし／＼還俗する人さへもあると云ふ……予も還俗したい……咄……

之からの僧侶は昔と違ひ、自ら鋤鋤を取つても尙感化救済、布教傳導に努力せねばならない。棚からボタ餅のコロゲルを待つ様な時機とは違ふ。人を治むる者は人に養はると云ふ言葉は、有名無實だ。世ははたで見居る籠の鳥式だから、油断はならぬ。我は天下の大導師だ。人類を教化する僧侶だと云つても、或は法施をいくら安賣しても世間はなか／＼買つて呉れぬし、坊主を見たからと云つてそうやす／＼は養つて呉れぬ。他人の口よりも自分の口を愛するが又當然なもの。やはり食足つて禮節知るの理窟は、民をして信ならしむるよりも先着でなければならぬし兵

足る事もやはり食なくては問題にならぬ。が併し、此の境に立つて食を足らしめ禮節を知らしむる事に氣付かねばならぬ。治者も被治者も精神的勞働者も肉體的勞働者も、人の仕事を樂だと思ふの暇なく、只天賦の職に向つて専心努力して金が慾しくば働いてとるの方法にて、使ふ人も使はる人も擧つて働くと云ふ勤忠實なる精神は、必ず眞の治者たる宗教家より傳へらるゝものである。宗教家は強いて人に報酬を求めず只専心に、人を教化傳導するを以て能事とするが故に、養ふ人あらば之に養はれ施す人あらば之を受く。若し食ふに物なく誰あつて與ふもの無ければ所謂治者にして尙被治者たる肉體的勞働を忘れてはならない。と同時に肉體的勞働中に生きる人、所謂被治者側にある人は其の苦しい時の神だのみもあれば、精神的勞働者而も、一方宗教家ある事を忘れてはならないし、且つ精神的修養宗教的觀念を抱かねばならぬ。治者側の所謂無資産階級の人と、肉體的勞働者の間に於ける即ち天下廻り持ちを充分咀嚼せねばならぬ。そして苟も生を得て神聖なる勞働中に

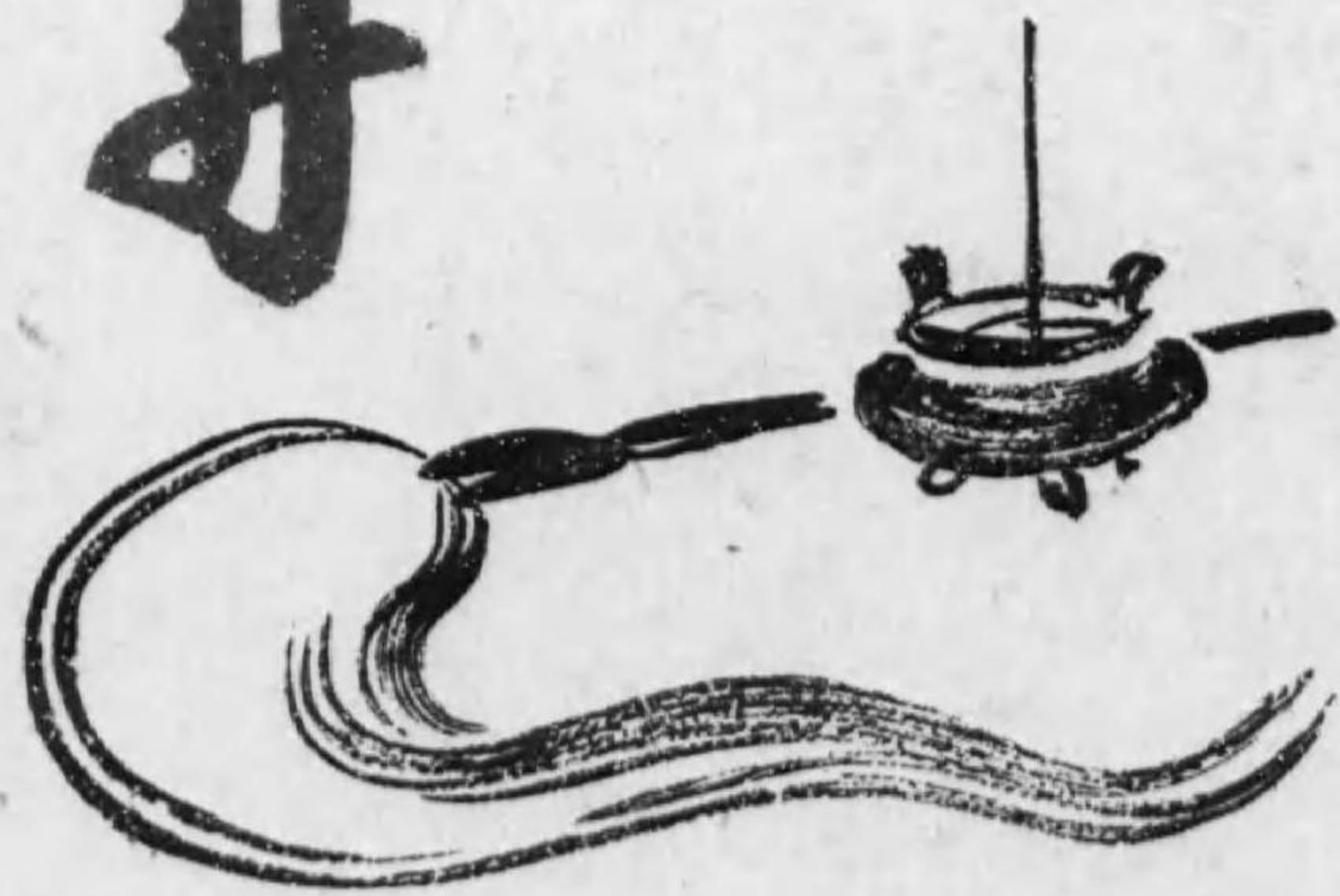
刻  
去  
刻  
母



所謂治者と被治者

ある所謂治者も被治者も、使ふ人も使はるゝ人も、上役も下役も、資本家も労働者も  
智識階級も無智識階級も、米屋も酒屋も荒物屋も、魚屋も牛肉屋も豆腐屋もすべて  
悉く、共同生活の眞意義を理解せねばならぬ。即ち報恩謝徳の觀念がなければ  
圓滿なる社會の改造も社會の進歩發達も見ることが出来ぬ。

刻  
去  
刻  
母



所謂治者と被治者

ある所謂治者も被治者も、使ふ人も使ける人も、上役も下役も、資本家も労働者も、智識階級も無智識階級も、米屋も酒屋も荒物屋も、魚屋も牛肉屋も豆腐屋もすべて悉く、共同生活の眞意義を理解せねばならぬ。即ち感恩謝徳の觀念がなければ圓滿なる社會の改造も社會の進歩發達も見ることが出来ぬ。

## 宗教と其妙理

### 宗教の興亡と國運

横十方縦三才の全宇宙は、無限であり且つ絶大であつて、其眞理に至つては、容易に解し得べきものではない。世には科學あり、哲學あり、倫理學あり、皆洋として日に月に進みつゝあるけれども只之は智識才能が、宇宙物質界に向つての、考究に過ぎぬのであるから、可知的より不可知的に至らば、逐次に不可解の事が起つて來るであらうし又疑問に疑問を重ね、辯明の不及點に至つては、只天地自然の配劑なりと云ふより外は無くなるであらう。物質界の現象すら斯の如き有様だから精神の無現界に至つては到底、學問や理窟位では了解の出來得るものではない。唯心とか唯物とか云ふ、學説もあらうけれども、是亦表面上の理論に過ぎぬ。宇宙の眞理換言せば、眞如法性の理に至つては是非共智識才能を超越した、絶對

的或力に依らねばならぬ。眞如法性とか、宇宙眞理、或は宇宙の實在なご、六ヶ敷く云ふ其は畢竟、心の問題であつて世人の多く、不平煩悶に苦み、悲觀厭世の迷境に陥るも、悉く心の不解即ち、不安心不立命の其れなのである。そこで此の荒蕪せる精神界を開拓し、世の塵勞に纏縛せられて、鬱憂の淵に呻吟しつゝある、不平不安迷境墮在の人をして、解脱の妙境に到らしめ、東接西觸左展右轉遊戲自在の、活三昧ある事を自覺せしむるには、やはり前に云ふた絶對的或力即ち、自己の信する宗教に依らねばならぬ。宗教と云ふと直に、アリガタ屋の專有物の如く、佛を拜し神を禮し、香を焚き燈を献じ、念佛讚美歌乃至は、名號題目を稱揚し、只單に往生極樂を、未來に願望すると云ふ様に思はれて居たのが、世間一般の常であつた。其であるから、文明の進むに従つて宗教は退くものなり……なご、飛んだ誤解を來すのであるが、之はつまり一種不完全な、且つ幼稚な迷信的宗教にある事で、完全なる宗教にあつては、益々我邦文明と正比例して行かねばならぬ。否國家

の興亡は宗教の盛と衰とに基くものである。そこで此の完全なる宗教は、我邦だけでもたくさんある。

語黙動靜體安然

神教佛教耶蘇教、何れも其人々の根機如何に依りて、信せらるゝ所のもので、疎より細に至らば其類區々として、實に複雑である。そこで我佛教中でも、徧圓權實大小自他實に其數は繁多である。而し何れも、其眞實義諦に至つては、毫の差隔無き事、今更言を弄するにも及ばぬ。我田引水にはあらざれども、適々禪的に走るかも知れぬが唯暫く言語駢辯を打して見ようと思ふ。却說宗教と云へば實に、甚深微妙なるもので、一朝一夕の論ではないが兎に角、吾等が毎日飲食をなし、起居座臥すると同じく、一時も離るべからざるもので、眞に平生心是道なのである。未來を願ひ、極樂往生を頼むが如きは、宗教本來の眞義ではない之は只、差別の餘波とも云ふべきもので、善巧方便と見て差支へ無い。元來宗教の妙處は、一舉手一投足の

間にあるので、其の眞理の本體、不生不滅、平等即差別の理は、自ら露堂々活潑々でなければならぬ。茲に至らば何ぞ必しも、靈魂と説き神と説き、佛と論じ永却の生命云々と、種々な閑家具を、弄すべきの必要は無からうと思ふのである。斯く云へば、宗教は漢として、捕捉し難きもの、様に見えるけれども、決して其うでは無い。飢えて食ひ、渴して飲む時の心的境界と同じく、其物になつて主觀的に會得せば、直に自ら肯ふの時節が来るのである。即ち自肯底より生るゝ一條の活路、轉身の一路は美人に逢ふて美人殺、鬼人に逢ふて鬼人殺、悉く殺し盡して始めて安居底のものであるから「寒時寒ニ殺閻黎、熱時熱ニ殺閻黎」と云ふ、所謂私の方で云へば、此の禪的修養が最も必要である。森羅万象運用の妙機を會した其曉に至つては、動靜去來、左之右之の間に於て、言語理論を超えた、眞理の實在を認め得るであらう。茲に至つて初めて、手の舞足の踏む所を知らぬ、大歡喜地を得、胸中一點の芥滯なく、行く所に行き、止まる所に止まり、何等其所に寸毫の自縛底なく即ち

安心決定を得て始めて、休するに至るのである。之を孔子聖人は「己れの欲する所に隨へ共、矩を超えず」と、斯くの如く實に、活達自在の働が、現前するのである。己れが欲する所、好む所に任せて而も、倫理道德に違背せず、天地自然の理に叶つて行くといふ、實に楽しい事ではなからうか。それであるから、縱令不平不満の中に居ても、之が却て太平圓滿となり、悲觀も變じて、樂觀的となり、四圍の境遇は、悉く菩提國——蓮華國——と變ずるので、今迄の煩悶不平は、毫も湧き出ない筈なのである。此の拔苦與樂——轉迷開悟——悲觀を轉じて樂觀となし、娑婆即寂光淨土の本體が、所謂禪的妙味の活現であつて、宗教の偉大なる力の現れである。

夜々抱佛眠。朝々還共起。起坐鎮相隨。語默同居止。纖毫不相離。如身影一相似。欲知佛去處。祇這語聲是。之は我が宗「傳大士」の偈であるが、禪の妙味宗教の適處が、斯くの如き平淡無味の處にあり、而も其事を解せば、實に至道無難。直下に

其の何をか會得して以て、語黙動靜體安然の境に、透達し得る事が出来るのである。

### 禪の難易

#### 佛も昔は凡夫なり

近頃、禪學々と云ふ聲が甚だ高くなつて來て、處々に居士會とか、接心會とか、禪道會とか云ふものが頻りに設けられ、禪に關する著者も頗る多くなつて來た、一種の學問的傾向になつたように思はれる。

従つて世間の學者等が、いろ／＼と禪に對するの論議をして、極度に紛々たる状態を呈して居るが、つまるところは其の了解に苦しみて、「禪は俗人にして容易に解し難きものなり」と等と云ふ、逃げ口上を吐く者の續出するのは、實に氣の毒千萬な事で、之も決して無理からん事ではあるが、俗人に解し難く、凡人に六ヶ敷いのが、決して眞の禪學ではない。眞の禪學とは、簡易分明なる見性の直道であつて、寧ろ此の道に至つては、學問と云ふよりも信仰に近いから、智慧や分別等で分るものでない

佛も昔は凡夫なり

れば、文字言句の上の仕事では勿論ない。

それであるから敢て、學者諸方の御手数を煩はさんでも、單傳直示の法に至つては、縦令俗人といへども之を、信念力に依つて得せしむる事が出来るのである。決して學者識者でなければ、此法を見得し能はずと云ふ事はないのである。よく禪者間に唱導せらるゝ山梨平四郎の如きは、實に其の善例ではあるまいかと、予も常に思ふて居るのである。佛も昔は凡夫なり、凡夫も悟れば佛なり。何も俗人だからと云つて、了解の出来ぬ事もなければ、悟れないと云ふ事は決してない。

茲に俗人と云ふは所謂凡人の事で、聖人に對して云ふ所の對稱語である。聖人は堯舜禹湯孔子に限つた事はない。即ち智徳勝れて神の如く、萬事に通ぜざる事なき達人とか、世塵を超越した悟道覺者を指すのである。それであるから、聖人には更に、禪學研究の要も別段認めず、新に今修養云々を勧める要もなく、一切の法門などに至つては、釋迦に説法だ。今は只俗人の爲にこそ、修養も必要であり、信仰

も肝要であり、又修禪見性の如何をも解せしむるの要を認むるのである。即ち俗人をして、「脱苦得樂」凡を轉じて聖となさしむる爲であるから、六ヶ敷くして解らぬものでは、縦令無上の法門といへども、向上の宗旨といへども、何の役に立つものではない。猫に小判、馬の耳に念佛だ。自力とか他力とか、大乘とか小乗とか、いろ／＼に區分されて居る無量の法門は、只だ是を信する人の根機々々に依つて、設けられたものであるから、己れの機に隨つて、其教理を究め、其信に投じたらよからうと思ふ。

そこで熟々是を見るに、他とは違ひ、禪宗と聞けば「永い年月を費してやる難行苦行の宗旨であるから、到底凡人には駄目だ」と世の人は早合點して「寄り付かぬ」底の、感があるけれども、其俗人凡者の爲にこそ必要なる此の佛智見を得せしむるのであるから、決して六ヶ敷いものではない。

千江水あり千江の月

千江水あり千江の月



抑々禪學とは「直指人心見性成佛」直に境に入つて、心性を見得するの法であつて、他に劣らない處の手早い修養法なのである。却説此の見性と云ふ事は、我々が日夜使ひ用ひて、片時たりとも離る事なき、自分の心を、智慧や理窟を假らずして自覺する事であつて、茲が所謂佛智見を得たとも云ひ、成佛したとも云ひ得るので三世の諸佛、歴代の祖師と自己の心性とは、本來同一不二にして、無始劫來我々と諸佛とは無論、山川草木有情非情一切萬物皆已に、成佛作祖了して、トツクの昔に無爲の境に入つて居たのだと、自覺發明するの謂であつて、別の事ではない。昔、大覺世尊、雪山に在る事十二年、一夜明星を徹見して、豁然悟——「奇なる哉、奇なる哉、一切衆生は、如來の智慧徳相を具有す」と云はれた事がそれである。故に見性した以上は、何うの斯ふのと云ふ妄想も、疑惑もある筈なく、唯此まゝに一切の國土を領有して以て、一切人天の爲め濟度の願力を、自由自在に案排處置して無始無終なるべきである。是を見性の人と云ふので、取りも直さず「上求菩提下化

衆生」即ち、菩薩の行底なのである。又敢て五千餘卷の經典を讀破し、聖賢古徳の言句に依らずとも、只管南天大師が示された「直指人心見性成佛」の法を信じて疑はなかつたなら、必ず見性の出來ぬ事はないのである。それを世の人は餘りに思ひ過して、却、無繩自縛に陥り五里霧中に雲を攔むが如き結果を見るものである。實際此の見性程簡易なものはない。決して永き年月はかゝらない。此の簡單明瞭な見性の法を稱して、眞の禪學と云ふが故に、決して禪は六ヶ敷しいものでない。斯云ふと、世人は必ず種々の疑を生ずるのであらう。曰く「古來から難行苦行、十年廿年する人達其數多い中にも、所謂見性得道せりと云ふ人は、如何程あるか。尙九牛の一毛にも及ばざるであらう。大教主釋迦牟尼世尊が、草衣木食、雨に打たれ風に揉まれ、古今絶世の難行苦行十二年間の雪山に於ける學道は、今之を聞くさへも實に身の毛がよだつ程なのに、易行纔の間に見性の大事を手に入るゝなどは、仲々以て自認し能はざるものであると。此疑ひとても一理なきにはあらざれど、世尊十

二年の苦行は、此法の六ヶ敷い爲ではなく、最も簡易なる見性の方法を、發明するが爲に苦心されたのである。斯くの如き年月と、斯くの如き苦行とに依つて、發明せられたる見性の法門が、とりもなほさず眞の禪たる所以のもので、文字を離れ、言句を絶し、而も以心傳心にして、千江水あり千江の月……だ。看よ世尊先づ頓漸權實の説を設けて、開談遊化せらるゝ事、三百六十餘會。此間實に四十九年の永きに亘る。而も最後には「四十九年一字不説」と説かれたるが如き、實に其の的々言であらう。世尊拈華微笑の一場に於ては、遂に摩訶迦葉に附屬するに、正法眼藏涅槃妙心、實相無相微妙法門」を以てせられた。此の事が傳法の初となり、迦葉から廿八傳して、達摩大師に傳はり、大師は萬里の波濤を越えて、中國に渡り魏の國の少林寺に錫を留め、「教外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛」の法を以て、其標榜とせられ、是より法は神光二祖慧可大師に傳はり、滋々として四百餘州を綯ひ遂に吾國に入りて法孫其法を、一器の水を一器に瀉すが如く、傳へ傳へて殆んど一

千有餘年吾宗風は儼として、今に偷る事あるを聞かぬ有様である。

刻苦光明必ず盛大

さて釋迦出世當時から、今に至る迄の諸佛諸祖聖賢古徳方が、何れも此の大法の爲には身命を惜まず、堪え難きを堪え、忍び難きを忍びての大難苦行、而も五年十年乃至三四十年の月日を費しての、修行の道程たるや、聞くさへ恐懼の至りでもあり、勿體ない事でもあるが、之れ畢竟簡易なる此法を疑ひて、世尊拈華の旨を學ばず、南天大帥の禪法を信じて、直指人心教外別傳の方法を教の通りに修行せざりし罪にして、見性の法、禪宗の旨が、取てむづかしいものではないのである。其證據には、今でも眞正の善智識、高德なる師家其人に就いて聞いて見ても『自分達が此道の爲に永き月日を費したのは、法の難事にあらずして、餘計な脇道を探し歩いた爲で、寶所近きにあるを知らず只、無駄骨を折りたる罪なり』と答ふるに違ひない同じ無駄骨でも、有意義のもあれば、無意義のもあると云ふ。昔から「刻苦光明必

盛大也」といふは、吾等修行者の策勵語なる故に、光明を發する無駄骨はいつか知らんが、必ず盛大なる時が来る……とは云ふものゝやつぱり、無駄骨は無駄骨で、どうせ永い年月を経るのであるから今迄の論から云へば、少しく違ふ所がないでもないから、先づ一旦此の法を得んとせば、師家の垂誠一言一句を、堅く信じ、或公案に向つて慕直に勇猛精進したら、何ぞ此の長日月を費す必要があらうぞ。何も六ヶ敷い理窟も言句もあるものでない。古語に曰く『勇猛の衆生の爲には、成佛一念にあり、懈怠の衆生の爲には、涅槃三祇に亘る』と。是れ修行者の取つて以て、必須の語たるべきである。くだらぬ妄想や、いらぬ閑家具につき廻されて居る連中を懈怠の衆生と云ひ、到底今世は勿論、來世、來々世遂に永世かゝつても、成佛の出來得ざる事を示したものだ。予の本文に論じ來る其の希望は、勇猛精進底の衆生あつて、一念頭に見性成佛せられん事にあるのみで、かゝる見苦しき蛇足を書き捏つたのである。永世見性の機成佛の眼を得る事難ければ、折角の無駄骨もそれこそ

無駄となり、骨折損をせねばならぬ。是れでは能く云ふ棺木裏暗眼底だ。斯くの如く云へば又「見性成佛の法門たる禪學が、果して單簡易行の法で、教外別傳、不立文字等と傲語を吐き、言句も理窟も何も彼も要らぬと云ふならば、世尊四十九年の説法、五千四十餘卷の經門は、畢竟無用の長物であらう。然るに何故斯る無用の材を、今日迄相傳へて残したのか。四十九年三百餘會の説法が、一字不きなら、其の不説の説を教へて貰ひ度いなぞ、屁理窟を持ち出す輩もあるであらう。而し不説の説と云ふのが即、見性成佛の法なので、此の不説の説が知り度くば勇猛一念頭の成佛底に依るべきである。又此法は縱令、簡易であるからと云ふて、筆先や口先で、教へ授ける事の出來ないもので、いくら山の如く本を重ねても、どんな能辯家が廣長舌を振り廻しても、到底其眞境を得せしむる事は出來ない。何故にそんなら五千四十餘卷が世に出で、三百餘會を其當時、設けられたかと云ふと實は釋尊も此法を以て普く人天に傳授し、男女老若一切平等に見性成佛せしめ、

刻苦光明必ず盛大

安心の域に近前せしめやうとせらるゝけれども、世人兎に角に此法を信せず、自ら種々の疑惑を起し、餘計な小智慧小理窟を捏ね廻して、單刀直入せざるが故に、茲に罷むなく、五時に分け、入教に別して其杓機くく随つて教を設け、其れが今日に到つて、自他權實大小となり、數多の宗派となつて、具體的ならはれた迄の仕事である。それだから尙更簡單直截なる眞の禪に至つては、沒交渉でなければならぬ。

標月の指叩門の瓦

是故に今直に見性をなし、具眼の徒たらんとせば、最初は必ず心頭の理窟を打破し、六根六識を放下して、大信念、大奮志の兩刀を以て、己れが大疑團に向つて、直截して行かねばならぬ。此時に當りては必ず、師家の垂示する一言半句を信得及して、其言葉には一點の不審を抱かず、勇猛精進に修する時は、見性了々鏡を見るよりも明かな事である。若し或は纒にして、見性なし能はず、三年五年乃至は十年二十年かゝる者あるとしても實に見性した其曉は「永き年月を徒費せしは、學

者自身の信不及の致す所であつて、本來簡易了々なる此禪學が、決して六ヶ敷いものでなかつたと云ふ事を、自證すべきは勿論であるのみならず、手の舞ひ足の踏む處を知らざる程、大愉快な心地を感ずるであらう。

要するに唯、眞の禪學たるや、極簡易單純なもので、廿年卅年と長日月を要すべきものでなく、單刀直入其一句半句を信得及して以て、直に修し直に見性なすべきである。種々な道理や言句は、世間に掃く程澤山にあるが、是れ眞の禪學とは云ひ難く、只標月の指、叩門の瓦に過ぎぬ。又如上の駄辯も只ほんの、予が妄想には過ぎざれど、頭からゆきなり、禪の簡單、見性の平易を述べて他を顧みないのでなく、吾が的々相承禪を、敢て輕視したわけのものでは決してない。若し此の卑見中萬分の一だも、合理の微影を認むるあるを得ば幸にして祖佛の叱責を免れん？

# 孤峯の鐵漢

## 羊頭狗肉の敗闕

臨濟禪師曾て大衆に示して曰く「一人は孤峯頂上に在りて出身の路なし。一人は十字街頭に在りて背面なし。那箇が前に在り那箇が後にある」と是れ果して何を意味したものだらうか。孤峯頂上に在つて寸歩半歩も塵寰に移さざる所、身は寒岩の如く心は枯木に似たる様、正しく是れ鐵漢たるの標榜に外ならぬ。鐵漢とは抑々何者を指すや？と云つて此鐵難なかくの強者である。世に謂ふ忍耐克己に富める者か、否忠實正義か、剛直勇邁か、將た又豪俠快活か、言葉は多種多様であるが畢竟する所唯眞面目是れのみである。この眞面目なる正直者を禪者仲間と呼んで鐵漢と謂ふに過ぎず。所謂堅忍不拔の氣性を有し、拔山蓋世の氣概を有する底の大

丈夫の強者を指したのである。此の一つの鐵漢より起る聯想憶測を其まゝ書いて見ようと思ふ。

鐵漢!! 鐵漢!! 是れ果して如何なる人を言ふのであらうか「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、無論鐵漢に非ざれば吾が向上の禪を修する事も難く、參禪學道の大事を成し遂ぐる事や愈々難い。然らば何者をか「鐵漢」と云ふ。喝雷を震ひ棒雨をあびせかける者必ずしも鐵漢とは云はれじ、佛を呵し祖を罵り世外に超然たるもの又鐵漢とは稱する能はず。まして況んや一則の公案を舉唱して自ら禪機に誇り且つは、一句の爛葛藤を拈弄して以て頓悟なりなど吹聴する者の如きに至つては笑止千萬而も禪錄の些端を繕きて巧に舌端を弄し禪句を暗誦し或は漫りに見識を振り廻はすに至つては三十の熱棒下に打殺して狗子に喫せしむるも、未だ以て物足らず爭か鐵漢の黨中に入る事すら許されよう。是等は畢竟智辯才を以て眞聖なる禪を賣弄するに過ぎず、舌頭上些子の禪あるを知つて尙通身眞箇の禪に參するを解せぬ。鐵漢

は愚か鉛人形にも劣る者と云ひ度くなる。縦しや一身を通じて多少の禪を得るとも、心地上の禪味は夢にだも味はふ事は難からう。又心地上の禪たりと誇ることも心身を放下して禪を究盡するに至るを知らぬであらう。それだから忽ち生死岸頭に立つてイザ一步を進むる時、百尺竿頭一步を超ゆる時、果然として周章狼狽右往左往を免かれまい。忽ち順逆の波浪に翻弄せらるゝだらう。事ある時には、歴然として而も手忙脚亂前三後三の醜態を演出するだらう。斯んな風で如何して鐵漢とか丈夫の士とか云はれやう。三世の諸佛をも一口に吞却すと稱する程の口を持ちながら愛語の徳をも持つ事能はず、節酒の禮をも守る事さへ出来なければ、向上の玄談も一種の戲論に過ぎぬであらう。佛來るも亦打し祖來るも亦打す等と云ふ手を持ちながら自己一身さへ支ふ事が出来ざれば折角の見識も、狂者の寢語たるに過ぎまい。而も臨濟の機鋒、彩を徒らに宜似て却つて臨濟の家風に辜負するが如きに到つては是れ恰も、虎を描かんとして猫兒にだも及ばず獅子を作らんと欲して狗子にだも至

らぬと等しい。寧ろ却つて羊頭狗肉の敗缺底に墮するよりは、初めより猫兒は猫兒、狗子は狗子にて與塵にし去るが得策と思ふ。茲に到つては愈々鉛人形も管ならず寧ろ藁人形に如かざると云ふべしだ。『鐵漢』たる語源すら不可解の思ひがする。甚だ以て恥かしき事ではないか。昔瑩山禪師の御垂示に『縦令心さどく耳どきによりて諸々の書籍聖經をも一字も遺落する所なく聞持すと雖も、心もし通せずんば徒らに隣の寶を算するが如し』と。是れ實に痛快な教訓の妙句である。

憎愛無ければ洞然明白

抑も修禪學道せんと欲する時は必ず其身鐵漢でなければならぬ。所謂道を求むる志堅く其の物に至誠であり親切であり、前述の如く極真面目が第一の肝要條件である。吾等若し大丈夫の志氣あらば心地泰然、決して物に動着する事なく名利の爲に役せられず聲色の爲に驅使せられず、所謂眼に不淨を見ても心に不淨を見ず、耳に不淨を聞かぬも心に不淨を聞かず、只専心道に進み道を守り法を求めて法を護る時

は、唯法あるを知りて己れあるを知らず道あるを知りて私あるを知らざるに至るので、前提した孤峯頂上の風光とでも云ふべき禪者の當に必擇すべき大安心底なのである。『吾心常盤の松に似たりけり。世のよしあしに色を變へねば』と云ふ所は實に堅忍不拔の眞摯的氣性が現はれて居る。此の境に進めば、絶學無位の閑道人が妄想を除かず眞を求めず、八面玲瓏、裏も表も内も外もなき絶對の地位に到る事が出来るので俗に來る者は拒まず去る者は追はずとある。もう此所迄來れば十字街頭乃ち世俗紅塵の眞只中に居ても一人に面はず一人に背かぬ所謂、進歩の端的が會得出來たのである。即ち來る者を拒まざる底は嫌厭的の心行を離れ、去る者を追はざる底は束縛的の因縁のなきを意味して居るので『唯憎愛なければ洞然明白』なのである。それでもあるから強いて善を行ふに意なけれど一言一行盡く善となり又惡を離るゝ意なきも一進一退盡く惡に遠ざかり、一擧手一投足の上自覺々他の功徳を莊嚴し得るのである。其れであるから上に對しては自ら孝順となり下に向つては又慈悲

仁愛となり、身は是れ道德の標榜、行ひ是れ濟世の光輝と現はれるのである。是れを又禪臭く云ふならば、魔に逢ふては魔を降し惡に逢ふては惡を化し、佛に逢ふては佛を讚し善士に逢ふては善士を樂ましむる、是れ所謂法性の妙用天真の倫理となすも敢て過當の言ではない。終日孤峯頂上に住し又終日十字街頭を離れざる怡も向上向下宛轉無礙、即ち實參實究に依りて當さに實現すべき行持の状態なのである故に參禪學道の吾等衆徒は先づ孤峯頂上に徹底的安住をなさねばならない。従つて十字街頭の妙用は招かずして自然に來るのである。鐵漢!! 鐵漢!! 是れを鐵漢と云はずして何と云ふか。 日本羊毛工業會

馬祖の大喝臨濟の痛棒

抑々禪門の宗匠と稱する人には見るも氣の毒な程短氣なものがあり可笑しい程又世事に迂遠いがある。中には超世と構ひ込んで愚夫愚婦を相手にするのを嫌ふたりする事は珍らしくない。然りとて又餘り世間を知り過ぎて世事を生咬り其糟粕に酔

ひ徒らに人を馬鹿にして見たり人の揚げ足を取るとか、先賢古徳を罵評して豪語大言する等に到つては鉛漢は愚か、藁漢泥漢にも劣ると云つてもよからう。加之動もすれば一方金看板を掲ぐる程の宗匠でありながら、居士大姉其他の禪流を接待する程の地位にありながら、細行を輕んずる風あるは勿論、慈念に乏しく上求菩提下化衆生は只口の先き鼻の穴ばかり、若し物質的欲望の先入されたる時等には、際立つて所謂坊主根性が發揮される等に至つては、淺ましいことも何とも謂ひ様がない（誰しもと云ふのではないが）、一再孤峯頂上に安住し竿頭一步を飛超えた精神界の大覇者たりと任ずる其の人が、つまらぬ名利の爲めに赤裸々の醜態を發見せらるゝに至つては雨露に朽ち果てた藁人形、火中に投り込まれた鉛人形も未々残酷である。鐵漢などは夢にだも思はれぬ程同情に堪えぬ。大悟とは世を離るゝ事に非ず禪機とは衆生を度外視する事に非ず。況んや修業底參學の者にあつては將に眞摯なる眞面目なる鐵漢であらねばならぬ。斯うして見ると教師も學生も、師匠も弟子も、師

家も學者も皆共に鐵漢でなければならぬし眞面目でなければ到底物事は、大成を期し難いのである。昔黃檗は臨濟に棒三十を喫せしめた。而し此の棒と此和尚と果して鐵漢であつた事は事實證明されて居る。三日耳を聳せしめた馬祖の大喝が、百丈をして孤峯頂上に安住せしめたのも、皆鐵漢の寄り集りだから……無論棒も喝も猥りにせざれば、棒頭に眼あり喝下に光明を放ち、共に大慈心の併發する所となるのである。棒喝能く無量の功德財を産み、世出世俗諦眞諦に亘つて是を利益し又能く無邊の法門を打開して今後世を拔濟するものである。此棒喝こそ鐵漢の棒喝所謂孤峯頂上の禪、十字街頭に背面なき自在の法である。此の禪に參じ此の法を求め、此の棒喝に修業する者は豈夫れ鐵漢に非るべけんやだ。又鐵漢に非ずんば此の棒頭喝下に眞面目な修業は到底出来ぬのである。

要するに孤峯頂上に安住し、背面なき十字街頭に突立ち、束縛的因縁もなく嫌厭的心行なき、即ち唯憎愛無ければ洞然明白なる境致を得ねばならぬ。是を至誠と



云ひ、忠實と云ひ、眞摯と云ひ、眞面目と云ふ。鐵漢豈夫れ何者か之れに敵するあらん。佛魔共に打して倒退三千ならしめ、所謂吳來らば吳、越來らば越、強いて煩惱も除かぬと同時に求むべき眞もなき裏表ブツ通しの、實に何とも云へぬ爽快極まる心持ちになる。鐵漢!! 鐵漢!! 敢へて頑固に非ず、偏屈に非ず、默然に非ず、擔板に非ず、鐵漢能く眞諦俗諦に亘り宗通も説通も自在にして且つ無礙、師は師、弟は弟にして鐵漢たるべく、師家は師家學者は學者として自ら鐵漢なるべく、老幼は老幼男女は男女居士は居士大姉は大姉、自ら皆相應に鐵漢たるを要するのである。就中孤峯頂上にあつて尙古人の棒喝を嘗め其の活句妙語に參するの諸士は、須く鐵漢なるべきである。『高い山から谷底見れば瓜や茄子びの花ざかり』と歌つて孤峯頂上に立ち『見渡せば柳櫻をこきませて都ぞ春の錦なりけり』と詠んで背面なき廣い十字街頭に坐するも畢竟是れ無作の妙用。無礙の光明に外ならぬのである。

### 道は近きにある

#### 智情意三つの修養

「心」と云ふ問題は、之を古今に通じ萬人に照して、その追究に日も足らざるの最大難關で—圓うなるのも四角になるも、心一つの置き所—その置き所がなかく解らない。或は之が淺薄の見地に止りて、夙に自ら悟了せるかの如く、其見神論だとか死生觀だとか、又は唯心唯物云々と唱ひ、一時人心を風靡するかに似て、而も遂には「人生不可解」となり下つて、心のエの字も分らなくなるのが多い。其う云ふ拙者だつて、やつぱり心を得るに不可得か、人生遂に不可解なりなご、弱音を吐くの徒輩たるを免かれない。

一體心と云ふ事を、言語に現はし、文筆に綴らんとすれば、各方面に亘つて實に

廣い。一朝一夕にして之を言ひ盡し、書き現はす事は到底不可能な事、心位幽にして且つ玄なるものはない。心隨萬境轉、轉處實能幽」で一切唯心造だ。而し拙者の今云はんとする心は、心理學上から見た三つの立場に依つてなのである。即ち知と情と意の三つに分けて見たので、心の修養、精神の鍛練をする爲には是非共、此の三者を缺いてはならぬ事と思ふ。所謂知的の修養、情的の修養、それから意的の修養である。そこで知的修養とは何であらうか云ふ迄もない學問の進歩發達、智識の向上進前に連れて、其精神を鍛練し、品性人格を高尙ならしむべく、修養を續けて行く事に外ならない。情的修養と云へば、感情趣味の方から、修養の道に入る事即ち文學美術技藝其他の物に依りて、情操を涵養するを云ふのである。次の意的修養是は意志の力を鞏固ならしむる事で、吾周圍に或は順となり或は逆となりて、總じての事物が附き纏ふて居る其等が悉く、修養の資料となり、意志の試金石となつてあらはれて居る。今此の三種の修養を吾がからだに喻へやうならば、智的修養は眼

の如く、情的修養は手の如く、意的修養は足の様で、三者相俟つて始めて、完全なる活動が出来るとしたものである。若し眼たる處の智的修養ありとしても、足たる意的修養を欠かば、人生最後の目的地に到達し得る事は難からう。よし足たる意的修養ありて其地に達し得たとしても若し又手たる情的修養がなかつたならば、能く之を捕捉する事は出来ないであらう。斯う云ふ譯であるから、此第三つは而も一つ一つであつて又而も三つに分けてあるが、やはり其一つをも欠く事は出来ぬのである。

眼を社會萬般に回せば、今や實に生存競争の眞只中、所謂適者生存の理論は現實されて、各々皆不斷の努力を以て、各方面に向上し且つ發展せんとしつゝある有様は物凄しい。此の機急の活社會に眞の大活動をなさんどせば、先づ精神的活現が肝要であらう。而して此の努力とか向上發展とか云ふものゝ、其原動力はと云はば又能く此精神の鍛練、品性の修養からである。やつぱり心からなんである。心一つ

の置き所さへ確りして居たなら、智情意の三者を六つかしく思慮せんでもよい。

一物の心頭に掛る事なし

斯く三つに分けたのは少しく學問臭い様な點もあるし、余りに鹿瓜らしくもあるけれども、只に吾等が日用上に於ける總ての對境を取つて以て、直ちに吾身の修養資料とすべきのみを意味するに外ならない。道は近きにあるが、心に留意するとせざることは、遠近難易程の差があり精神修養の如何も之れに依つて違つて来る。凡そ吾等を圍繞する是非善惡、或は順逆得失等あらゆる境遇は、一つとして是れ試金石ならざるなく、修養鍛練の道ならざるはないのであつて、處世上の「三人行けば必ず吾師あり」と云ふも此邊の消息なのだ。甲の長所を見ては之に倣ひ、乙の短所を知らば之を退け、長短是れ補ふて初めて、圓滑なる人格を養ひ、高尚なる品性を助長し得る事が出来るであらう。

それであるから吾等は、此道に依つて能く鍛練し能く修養し得ば、方に始めて道の須臾も離るべからざるを知るに至ると同時に、四圍種々の境遇は全く吾心と同一にして、一舉一投皆悉く道ならざるはなきに至るであらう。水鳥の行くもかへるもあと絶えて、されども道は忘れざりけり」で、孔子の言はれた「心の欲する所に從へども矩を踰へざる」の境涯は自ら具備するのである。茲に人あつて如何なるか是道と問ふに對して「平生心是道」と答へた古人の意は實に此所であらう。道は近きにあり―實所在近―只此の平生心即ち是れのみで他には一物もあり得ないわけである。

まあ此の境に到るには精神的幾多の修養、所有鍛練を積まなければならず、心と云ふのもなか／＼容易ではなくなる。春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、若無閑事掛心頭、便是人間好時節」思へば人生の行路は恰も斯くの如く、雪月花涼風のあるに似て、幾多の波瀾、幾多の曲折、或は榮枯盛衰、順逆生滅と數ふるに違はない

一物の心頭に掛る事なし

が、此の人生旅程の間に處して、常に能く精神を鍛練し、又克く品性を修養し得て波瀾々々にあらず、曲折々々に非ず遂に一物として、心頭に掛る事なき洒脱の境に到らば、随分是れ好時節を得る事だらう。全るで明鏡の物を映して後暫くも影を留めぬ様、柳緑花紅共に忌嫌なく之を映し、漢來らば漢現じ胡來らば又胡自ら現はるゝと云ふ、轉ずる處實に能く幽なるの境地は、修養純熟のあかつきでなければ、到底味ふ事は出来ぬ。而し只境涯を得、修養の功充ちたればとて、之を等閑に附して超凡越聖を氣取り、只風流を事として、茶湯生花繪畫骨董の類に没頭し、世間塵事は吾關せず焉と、きめ込まれては又大變、それこそ亡國の民を造る様なもの。希くは各自の本業職分に向つて、此の修し得たる道の光を發揮して貫いたのである。或時私が、他に向つて坐禪修業の事から、精神修養の話に移り一是非共人は精神の修養が肝心だ、其方法はいろ／＼あるが、今私に云はせると坐禪の修養が一番だ。兔に角信仰が最も肝要だ」と云ひ終らぬ内に「己れ見た様に毎日／＼忙がしい者が

坐禪ばかりして居れる物か、本一つ見る事さへ出来ないものに」と答ふる人があつたので、やはり平生心是れ道を物語つた事があつた。敢て坐ばかりが修養でない。本を見るのが修養と定つては居らない。禪者は坐禪の法を以て説き、學者は學問の深淺を以て説くに過ぎぬので、修養せんとする人、道を求めんとする人は只、智情意の三つに略留して、日用上總ての對境を取つて以て、修養の資に充つべきである

# 眞個の禪的要領

## 一般から見た要領

要領と云ふ語が此頃流行り出して、上中下通じて到る處之を常套語の様に實用語の如くに使用されて居る。『彼奴甚だ要領を得ぬ奴!!』『彼んなに得不要領ぢや遣り切れぬ!!』等と兎角氣のきかぬ代表語の様になつて居る。そして又たとへ氣がきいた一般からは歓迎された事でも。其人御自分に氣に入らなかつたり不利益だつたりすると直に『要領を得ぬ奴!!』と怒雷一番。そうでなければ罵倒の代名詞的に之を用ゆる。無論要領を得ぬのは要領を得たのよりもよくない筈だと、一般の見る所大抵相場は決つて居るものだが、そんならば何處からが要領を得たので何處迄が要領を得ぬのか?と一思一考せば必ずしも氣のきかぬのが不得要領とばかりも云はれない。

又少し位氣のきいたのが必ずしも得要領とは云ひ難い。つまり不得要領な所に萬人向きの要領を得るのが肝要だ。茲に世渡りの秘訣處世の極意が存在して居ると云はねばなるまい。『うか〜と暮す様でも瓢箪の、胸のあたりに締めく〜りあり〜』と云つた様な所、實業家にしても教育家にしても、將た又政治家宗教家何れも皆、斯うした意味の要領が肝心だ。而し不得要領が子供の使ひの様な或は、俗に云ふ鐵砲丸の様な其後に何の役に立たぬ不得要領サでは問題には到底ならない。要領を得ぬ所必ずしも不得要領に非ず要領を得た所必ずしも亦下得要領とは云ひ難い。即ち其場所と其時日と其事物の如何に依らねばならぬし且又、其人の性格と現在に至る迄の過去の経路如何に依らねばならぬは、是れ事實の理であらう。又人に對する時のみでなくて、仕事する上業務を果す上に於ける要領と來ては、是れなか〜の難問題であつて、たとへ甲者の要領を得た仕事と乙者の要領を得た仕事を比較する場合等に於ては、随分其仕事に差別あり優劣あり巧拙あり且つ時間上の差も現は

れて来て、やはり得不得の要領問題が自然湧いて来る。是れ當然の然らしむる所ではなからうか。少しく世間的に渡るけれども之等の事柄を大體に披瀝して見たいと思ふ。

## 誤つた意味の要領

『要領のいい奴には叶はん』とは常に聞き馴れて居るお互同志の言語であるが、大抵此の字を使ふ所には智謀計略と云ふか狡猾詐故と云ふか人をうまく陥れて巧言令色の類を以てする意味に解せられて居る。よし其んな不道德に迄至らずとも要領よくやると云ふ以上は、多少其所に智慧も分別も必要だらうヤリクリ算段餘細工の眞似もせにやなるまいと思ふ！是れが手に云はしめば大なる誤りではなからうか。それから又同じ仕事をやるにしても、不熱心不誠實不眞面目にして其の成し得た仕事がたとへ如何ならうとも、其場丈けよけりや後は野となれ山となれ!!。何其場丈け主人の許可を得れば――検査官の眼を通せば――後は構はぬ式なやり方を、動もすれ

ば要領を得た如くに賞讃する低脳者がある。此者の評を其裏面に聞けば『彼の人にはなか／＼仕事が早い。そして見た所美しい仕事をする!!。見た所美術的な仕事をしたつもりでも粗製濫造で、足の下から鳥の立つ様な仕事ではたとへ時間が早くとも、更に何の役にも立つまいと思ふ。所謂急がば廻れ主義が此に至つて勝利者となるだらう。先きの要領者は後の不得要領者に勝を制せられたのである。其時は餘程旨くやつたつもりの仕事が存外、金箔のハゲを人に笑はるゝ事になるのが往々にして見受ける事があるのは、餘細工的な要領を以て事に當る故ではなからうか。是れに反して不得要領と来ると何だか馬鹿か阿呆かノロマに見え、氣のきかぬ抜け作にも思はれる。是れ又大いなる誤解と云はねばならない。瓢箪なまづの様に取り止めのない阿呆主義なものでも、胸のあたりに締めくくりあらば肝心な所に至つて必ず要領を發揮するものである。存外に不得要領だつた事が後になつて幸福を來たす事があり其れが本當の要領に變ずる事がある。是等は決して争はれざる事實であつて、

先方の不得要領な取り止めの無かつた事に依つて、自分の要領と思つた作戦も木葉微塵に、打ち壊されて終ふ事さへあるのである。

そこで此の要領を得るとか得ないとかは、強ち其所に策戦も計畫もいらぬ。又策略的要領は常に其場限りのものが多く、最後迄勝利を得る事は難いのである。人を引き入れる力所謂誘引力とでも云ふか。兎に角一言一行萬人の御氣に召す様なやり方であれば必ず、要領を得た人に違ひないし、之れが本當に要領のいゝ人とも云ひ得られるであらう。所が斯云ふ人に限つて一擧一投が總て瓢箪の如く不得要領な平常である。即ち不得要領な所に要領を握つた云はゞ作家の漢だ。必ず何事に依らず作りつけた策略的要領を眞の要領と意味を異にして考ふるは是を謬見と云はずして何と云ふ？

如才ないのも一の要領

一般に如才ないと云ふのは人に要領を得させると云ふのが其れの意味に近からう。

好都合を人に與へる!! 所謂氣をきかして一步も二歩も、自分を低うして人に譲るのだ。或は馬鹿と云はれよう、又はノロマと云はれよう。而し能く世の中の表裡を辨へ人と人との經緯を計り、俗に云ふ世の經驗者を指したもので苦勞人と云ふか、思ひやりのあるヌケ目の無い人間とも云へば云はれるのだ。それであるから元來自分は酒嫌ひでも宴席に招かれた時には其氣分になり、笑談の時は笑談を以て之に應じ眞面目の時は眞面目を以て之に應せねばならぬが如才ない事になるのである。飲めよ謠ひよの大酒盛りの席に『己れは酒は嫌ひなれば』と鹿爪らしい眞面目な面をする様な御方ならきつと人にも嫌はれ一向に要領を得ぬ人となる。まさかそんな不得要領な人もあるまいが、笑ふ時には笑ひ詠ふ時には詠ひ、隨所々に轉じて行く其所に要領の本然が現はれて來るのである。

而し乍ら如才なく人のよい許りが要領者でない事を一歩進んで考へなければならぬ。『人を見たらば泥棒と思へ』火を見たらば火事だと思へ』とは古い俚諺には過ぎ

ぬけれども『嘘は日本の寶』と云ひ傳へられた事より推して、馬の生眼を抜く程の世の中では油断も隙もあつたものに非ず。どうしても成る丈け人に要領を得させぬ程の要領を自分に涵養して行かねばならぬ。丁度之が軍略か政略か商策の様な有様で、先方へ要領を得させると終には自分の爲には非常な不得要領を來す場合になるからだ。而し之を一般から眺め近所隣りの交際にしろ、商賣上の懸引にしろ總ての意嚮情態が寧ろ人に、此の要領を得させるのがよい。即ち是れが文明に進んで行く人、時代に適合した人とも云へるので、たとへ自分は嫌いな事にしろ其場合に臨んで之を嫌忌なく内を外に顯はさず、己れを殺して虚心平氣に處して行くのが、言を重ねて云ふ自分も要領を得人にも要領を得させる事になるのである。又斯の人が萬人向きに役に立つのである。茲に到つて要領の得所が時と場所と其事柄の如何にも依り、其人の性格境遇にも起因する事である事が明かになつて來た。

不得要領の要領

『汝は酒を好むや』と問ふに對して『是』と答ふるや『非』と答ふるや……聞く人又酒を好むや否やは分らざれど、初から嫌ひなりと斷定を下さば如何又好めりと肯定せば如何。例は只一に止まれども複雑なる社會相互の交際に於ける事々物々は要領得たつもりのは是非斷定語が、案外に人の恨みを受け又誹りを受けて不得要領に終つてしまふ。而し『嫌でも好きでも無い』と云ふ答は又折角の問者に對して甚だ禮を缺きたる様にも思はれる。夫れよりは『時に依つては飲む事もあれど先づ攝生して居る。餘り多量に用ゐては却つて害になる……』位に不得要領な答が相應して居る。此の不得要領な所に云ひ知れぬ妙處の存して居る事は、一般周知の所だがなか／＼六つかしいのである。此の話は最近と云ふても十年も以前の事であるが、彼の東郷大將が時の遣英の宮殿下に隨ふてグレートブリテン國皇帝陛下の戴冠式に列し、米國を経て無事歸朝せられたが、到る處で無言の英雄たる名を博せられた。大將の特色は無言にして要領を得るにあつた。東郷大將此時赤道直下の印度洋を航



する時、乗客の一人「實に熱くて堪えられませぬ」と語る。大將無言。更に詰る猶又無言だつた。再三に及んで漸く謂ふ「心の持ち様でござる」とやつた此の一言、不得要領な所に眞の要領を得て居た。問者には果して得要領なりしかを知らざるも實に是れが活句であつた。無言の時既に要領を得ねばならぬのに所謂不得要領として追窮した。大將は已むを得ず兒を憐んで醜きを忘るの一句恐くは尙ほ問者には不得要領であつたであらう。禪も亦然り世尊は文殊の白槌に逢ふて無言の説法を試され、維摩は能く黙を以て大道を直示した。臨濟の喝も趙州の無字も雲門の露字も總て不得要領の裡に眞の要領、即ち頂上禪の大妙處を得るのである。世尊拈華迦葉微笑の話は是れ何の事かサツパリ不可解なり。此の不得要領の要領たるや全く押へ所の無き瓢箪の如しだ。梁の武帝達磨大師に問ふ「如何なるか是聖諦第一義」磨は「廓然無聖」と頗る要領を得た答をしたが、帝には不得要領だつたので「朕に對する者は誰ぞ」と云ひ放てば「不識」と答へたが、是れ又大要領を得べきであるの

に更に猫に小判だつた。達磨は實に老婆心であつた。其れであるから譬へ口を開くも僅に一言半句を以て要領を得るべきものである。

禪的要領とは何か

要領を得ると得ぬとは境界の近きと遠きと同一と不同とに依つて別る。世尊の説法に甲には有と説き乙には無と説くは對機説法だ。然も甲の説法も眞實語ならば乙の説法も眞實語だ。趙州和尚が狗子に佛性ありや亦無しやとの問に對し、一は無と云ひ一は有と云ふ。何れも眞實眞義の答なれども一瞥せば不得要領の如くも思はれる。然し決して不得要領には非ずして有無超絶の所共に眞の得要領であつた。是れ非思量の端的無爲の當體である。

「非思量處絶 思量 切忌將レ玄喚作レ黄

剝地識情俱裂斷 鑊湯爐炭也清凉

今の如くの人々は玄を將て黄となすのを不得要領だと思つて居る。之程不實な之

禪的要領とは何か

れ程識情にかゝはる忌むべき事はあるまい。向上と云へば仰ぎ向下と云へば俯す。圓互圓轉とは猫の目玉か七面鳥のやうに時々尅々に變化する事だと解釋する。是れ恐るべき邪言である。無定見無主義で只自己の都合のよい方へ何時でも轉ずる。人情や義理を云ふのは野慕の骨頂だと空嘯く。名の爲め利の爲めには蟻の甘きに執着するが如しだ。一の定見一の主義なく相手次第で御機嫌のよい様な事を言ふ。八方美人的に手錬手管の巧妙なのを當世向きだと賞賛する。是れが禪的處世法だなど、通がる野狐輩もある様だが。宜しく一棒に打殺して狗子に與へて喫却せしめねばならぬ。

眞理は環の端なきが如しだ。圓互を求めずとも進み進めば自ら圓轉の妙用をなすのである。試に頭を柱に打附けて見よ「ア痛!!」と後へ返らざるを得ざるべしだ。眞に向上の一方に進み進めば自ら向下の妙用を現すのである。向下又亦然りだ。「非思量の境界中に文字無し。文字なきが故に辯舌する所なし。故に諸の言論を絶す。

絶する所是れ佛境界」と文殊の言の如く「應に住する所無うして而して其心に住する」不得要領な執着を離れたる所に適所に主たる大要領は存在するのである。小人愚者之を見て番に要領を得ずと云ふ。豈夫れ止笑の至りと謂ふべきである。

得要領の妙用

「常に何も思はぬは佛の稽古なり。何も思はぬものから何もかもするがよし。生きながら死人になりてなり。果して思ひのまゝにする業ぞよき」とは至道無難禪師の假名法語で實に、大死一番大活現成と云ふべき言葉、何も思はぬ所が不の境界非思量の所超越の域、何もかもする所が得要領の妙用である。不は大死一番の處、得要領は大活現成の處でなければならぬ。古人の句に雨傘の讚をして此消息を能く傳へて居る。則ち

『展出雨中一別作天』

縮歸三屋裡一隅偏

機輪親有三轆轤轉

用舍行藏又自全

得要領の妙用

雨中に出で、別に天を作すも誇らず、屋裡に歸つて一隅に偏るも更に驚かず、用舎行藏、只々轆轤の轉するに任せて居る。雨傘の境界實に見上げたものである。山岡鐵舟居士の歌にも『晴れてよし曇りてもよし富士の山、元の姿は變らざりけり』嗚呼胸のあたりに締めくくりあるブヲ的の瓢箪實に隨緣任運の境、わけの分らぬ所にわけの分つた所がチャンとある。之れが不得要領中の要領とも云ふのである。

茲に筆を擱するに先立ち我國現下の精神界を觀察するに實に紊亂に紊亂を重ね、混沌又云ふに忍びぬ状態である。殊に意を注ぐべきは社會の元素たる一般の青年の思想界を横行するズボラなる所謂傍若無人な不得要領主義は、人世の努力を冷笑し秩序を無視し、怠惰放逸なる高等遊民唯一の信條なる感禁じ能はず。依つて其の邪解を一網打盡して以て眞の不得要領の大光明を發輝せしめねば相成らぬ。所謂眞の禪的要領を得て以て混亂せる現下の惡潮流を逆流せしめ、社會風教の改造に一大努力を盡さねば、殊に我々宗教者の席に列するの徒は社會に對しても相濟まぬ事

である。

# 坐禪の上手下手

## 好きこそ物の上手なれ

何でも物事には上手と下手とあり、巧いと拙いどが屹度あるものである。謠曲仲間には謠曲仲間、上手下手があり茶の湯連中は又茶の湯連中で其所に巧い拙いがある。吾等の讀む御經にした所で其の聞き手に依つては巧くも拙くも聞える。是は唯に世諦流布世間普通の事だが、向上の宗頂上の禪を修する爲めの坐禪に於て果して上手下手巧い拙いの差別があるか否か『下手な坐禪なら止すがよい』と云ふ嘲罵の片言を時々耳にするが元來坐禪其ものには上手も下手も有るべき筈はないし、又巧いの拙いのご其んな差別の有りやう理由がないけれども、やつぱり『彼の人坐禪の仕方が下手だ』『彼の人坐禪の仕方が拙い』等と評を縦にするのが誰しもの知る所

だ。而し此の意味の上手下手は唯單に表相のみを見て云ふたに過ぎぬと思ふ。先づ坐禪儀でも丸呑みにした連中から云すれば坐禪のスタイル？其の容態が悪いか坐禪儀の法に合つて居らぬとか眼が開き過ぎる―背梁骨が曲つて居る―首が少し垂れて居る―敷いて居る坐蒲團が高か過ぎる半伽はいけぬ結伽でなければいけぬ―杯と随分小八ヶ間敷い説明が要る。畢竟此の型に當ハマツタ者が所謂坐禪の上手な人でも云ふのか。甚しきに到つては少し昏眠的狀態になつて能く云ふ坐睡でも初めたり少し頭痛の氣味でもあれば『其はツマリ坐禪の仕方が下手だから……』等と一概に云つて終ふ。

成る程或る程度迄は坐禪儀も必要であらう觀法修法も肝要であらうが而し、必ずしも其儀法に依り型に當ハマラヌからと云つて坐禪其者の上手下手を評價する事は多少一考を要すべき事であらう否二考も三考も……先づ初心の人が少し坐つて足が痛んだり痺れたり又は腰骨が變になり目が眩むとか胸が痛むとか或は氣が茫然とし

好きこそ物の上手なれ

て更に五感の作用も鈍くなる等と云ふのは坐禪の遣り方で、其所に巧拙の區別上手下手の差別もあらう。けれども此の類に屬する坐禪の上手下手を以て、一様に徹底的向上的の修禪者を付度する事は愚の至りであらうと深く信するのである。百千の里程も初歩より初まる時實際七轉八起き疊の上で怪我しても赤兒の時には不思議でもない。却つて下手なヨロ／＼が赤兒の本然だ『歩くは上手轉ぶは御下手』と親が赤ん坊の手を引いて歩かせ『這へば立て立てば歩めの親心』の眞理も決して看過出來ざる一大眞理の秘在して居る事に氣が付いて欲しい。所謂赤兒であればこそ手も引いてやり足も持つてやる。初心初入の修禪者なればこそ足の曲げ様から手の置き様、眼の据え所まで教へるのである。是れが二十歳になつても三十歳になつても『歩くは上手轉ぶはお下手で』手を引き足を持つて貰はねば歩けぬと云ふに至つては片輪と同般。茲に至つては上手も下手も巧いも拙いも問題にはならぬ。

常識から云つて下手から上手に進む所謂若輩より老輩未熟より老練に至るのが當

然の論法であらねばならぬ。而し其所には天性とか生れ付きとかあつて字を書かしては拙いが畫を書かせれば素敵に巧い。座談は上手だが演説となるとサツパリ下手なのがある。やはり好きこそ物の上手なれで生れ付き嫌いな事は出來ない。業は幾等稽古させても上達しない。其れであるから甲乙二人を比較しても一方は三ヶ月で或る仕事を終了したが他の一方は未だ其の方法さへも頭に入らぬと云ふ事がある。其れを他の三者即ち丙が之を見て必ず二人の優劣巧拙を評笑するに違ひない。茲に至つて天賦の性に富める者は幸にして成功を得て『其仕業が上手である』と賞められるに反し。一方は必ず『下手なり』と嘲り笑はるゝは言を俟たぬ。

## 天性者を凌ぐ技倆

最も天性であらうとながらうと生れつきであらうと無からうと其人相應の努力如何に依つては、随分天性者を凌ぐ大技倆を現はし成功を果し遂ぐる輩なきにしも非ず。又同じ天性者同志でも其の優劣巧拙上手下手は其の精勵如何に依るかも知れぬ。

例へば職を得るに苦しんで居る者から見れば早く職業を見付け早く服でも着て早く金時計でもブラサゲ、何處其處の海岸へ別荘を建てると云つた様な人を羨む。會社ならば重役官廳ならば勅任官其上には大臣あり宰相あり當の點に於ても上下あり高低あり、世界的富豪となるも世界的政治家となるも是れ所謂世渡りの上に於ける處世術の巧拙優劣にある。即ち處世術に巧い人上手な人が社會に立ちて一の成功者となるのである。其處世術に巧みな上手な人と一口には云へるけれども、なかなか容易なものではない。やはり下手より上手に至る迄の苦心は天性の有無天賦の可否に論なく人々個々の努力精勵にあるものである。同じ吾等の仲間でも一寸した御經を讀むのに上手下手ありて施主檀徒の評に上る有様、聞き様見様にも依るけれども大概誰が聞いても誰が見ても氣持のよいと云ふ風調—アリガタイ感念を起させるのが一番上手と云ふ者だらう。其れにはやはり數を多く讀みつけた場慣れた人—經驗者熟練家が—最後の勝を占むるのだ。たとへ天性に聲のよい人と云ふけれども

一寸の間に合つた其御經が存外と役に立たぬ。己れは生れつきだからと云つて御經に依らず何事でも放擲て置いては、牛の歩みのよし遅くとも怠ける馬よりは勝を占むる様な世話と同一一般ぢやあるまいか。

茲に一例を一寸出して見るが何處へ行つても何人に逢つても直に噂の出る其人の字の書き振り。一寸手紙を見ても上手だとか下手だとか、實に區々町々「見た所キレイに見えるが勢がない」とか「勢はあるけれども書法に合つて居ない」とか「一字々々離れて見れば随分達筆だが、揃つた所は全るで見られぬ」又は「右上り」とか「左下り」とか墨の濃淡字の大小に迄評をするのだから、甲は上手と云ふ乙は下手と云ふ。全く何を標準に書の巧拙を論ずるのか解らなくなつて来る。文政文化頃に出た大雅堂崇拜家が其れに似寄つた字體を見れば巧いと賞め、明治初年に出た貫名海屋敬慕の人から眺むれば其れに似寄つた書風を憧憬すると云つた傾きがないでもない。最も之は單に一例に過ぎぬので只似たからと云つて似て非なるものの中には

あるのだから一概には云へぬ。所謂見る人々に依つて種々に變り其の變り方に依つて、其人の書が上手にも下手にもなる。大體象形文字を用ゆる東洋と思想文字を專用する西洋と多少異なる點があるけれども、同じ英文にしてもやはり其れには上手下手があり巧拙の別があるものである。横體の得意な人立體の得意な人、細文字の上手な人太文字の上手な人、行書階書隸書の巧い人もあれば連綿草に優れた人もある。一つの字も筆力の勝れた人品位の優つた書き振りの人、各々異つて居るのであるから誰の字は巧い誰の字は下手と云ふ事は一寸迂かり云へないのである。

形而上と形而下との坐禪

其所で上手下手巧拙優劣を云はぬとしたらどうすればよい？其所が上手下手の六ヶ敷い所巧い拙い分水嶺だ。誰が見ても誰が聞いても誰が味つても一様に上手と云はれ巧いと賞めらるゝのが肝要事だ。一方で上手で一方で下手なのは畢竟大觀すれば差引零だ。否一方に拔衆の力あり技倆あれば其方のオーソリチーであり霸王

であり大斗である。其れが只彼れも下手是れも下手何をやつても拙いけれども、やる事丈けはおやり遊ばすでは本當の上手に迄は行かぬ。最も何をやらせても専門家を凌ぐ程の者あらば之に越した事はなく寧ろ幸福な人、所謂之れが八方美人だ。彼の人は何をやらしても上手だ……と云はるゝが本當に上手と云ふものである。其れだから今云ふた如く萬人の眼に觸れてよいもの、千人の舌に味つて旨いもの百人の耳に聽いて巧いもの、十人の鼻に嗅いで氣持のよいものは皆上手でなければならぬ。巧くなければならぬ。其所がなか／＼六ヶ敷いので、若し十人百人千人萬人の御氣に召す事ならば代議士にも出れば大臣にも押される。其れが何處かに其人特有の人格と云ふか、何と云ふか他の決して侵すべからざる上手なる一點を備へて居る。所謂人をチャームさする丈けの威力ある、其威力を使用するの上手下手は其の人の成功否とに拘るのである。

其んなら坐禪する上に於ての上手下手は如何？故に「下手な坐禪なら止した方が

よからう』と。之れ何の意味だらう。下手なるが爲めに禪も修し法も學ぶなりと一擲を與ふる人があるだらう。之れ最も理窟なれども、吾が云ふ下手な坐禪とは前述した赤兒の歩行を指すのではない。坐禪儀の型にハマラレたる形而下のものではない。坐り方は如何でもよい。寢て居ても坐禪は出来る。行も亦禪坐も亦禪だ。語黙動靜體安然。必ずしも樹下石上沈々昏々として徒に無念無想を願ふ事もいらぬ。活潑々地の活社會に農に工に商に在つて各自の境遇に依つて自由自在の妙用を體現するにあるのだ。形而下の坐禪は下手でもよい否知らなくてもよい。吾が六祖慧能大師を見よ。元來一の水呑百姓纔が米つき爺に過ぎなかつた。別に坐禪儀の講釋も知らぬ無論其當時にあつては坐禪の方法などを書いたものは無かつたらう。近世に在つては了徹居士山梨平四郎其人。元來坐禪のザの字も知らなかつた一貧農に過ぎなかつた。吾が今云ふ坐禪の上手下手は前述の様なせま苦しい意味のものではない『下手な坐禪なら止すがよい』と云ふ口の乾かぬ内に『寢て居ても坐禪は出来る

ものだ』と云ひ度くなるが是れでは餘り極端過る様だ。

抑々下手な坐禪とは何や。即ち間に合はぬ融通のきかぬ片偏頗な一方向きな默照的或は天魔野狐式な或は又、口頭宗匠禪に走るものを意味するのだ。悟つた面して得意然たる野狐禪か禪の眞意義を打忘れて外見のみ飾る天魔禪か、只だ暗がり居る牛か豚の様な默照禪か、公案に追ひ廻されて一つ二つと階子的な階子禪か、數へれば滑稽禪頓狂禪氣拔禪等何禪々々でたくさんである。氣拔も讀み様で氣拔け禪になつて終ふ。此等の禪は何れも悪口の代名詞に過ぎぬけれ共、多少歩行が出来る位になつたら上手な坐禪をやつて欲しいが、其の上手な坐禪とは所謂即今禪とでも云ふか或は社會禪處世禪とでも名を付けければ付けられるのだ。即ち國家多端の今日只今、政治界に經濟界に實業界に向つて一超直入して以て間に合ふ坐禪上手な坐禪を望むのである。敢て僧侶其れ等には望まぬ。現に働きつゝある社會の人よ。老幼男女を問はず大いに上手なる坐禪をやつて貰ひ度いのである。



禪の活用に妙を得よ

吾れ先日或る政治家二三の會合した所へ偶然立寄つて知り合ひでもある爲めに話  
 は宗教界の事に波及した。或人曰く『禪學をやつて居る者にロクなものは居ない云  
 々』と此の言を聞いた時の予の頭には云ひ知れぬ暗流が漂ふた『馬鹿!! 坐禪をやつ  
 てロクな者でない奴は何をやつてもロクな事は出来ぬ哩』と一喝を浴せ度くもあつ  
 たが而し吾が目撃する禪者流の中でも、隨分間の抜けた氣抜け禪やら偏頗天魔の禪  
 を修して一向社會的融通の効かぬ人があつたから『物云へば唇寒し秋の風』だと  
 諦めた事があつた――

思ふに坐禪其ものには上手も下手もないだらうが坐禪者其ものに差別がある。大  
 道坦然決して變りなき大道も歩るく老幼男女に依つて遠くも感じ近くも想はれる。  
 禪の活用も修禪の如何に依つて清寥々白的々だ。禪の活用に妙を得れば夫れが即ち  
 上手な坐禪だ。禪に使はれるのと禪を使ふのとは雲泥の差霄壤の違ひがあらう。世

の中の敗北者落伍者は皆下手な坐禪家だ。社會禪國家禪に於ける處世術の下手な人  
 だ。

『下手な坐禪は止す方がよい』と云ふて『今日は多忙の世の中だ悠々閑々と坐禪す  
 る暇がない』等とは首尾轉倒だ。此忙がしい社會の潮流に向つて舟に棹し益々禪を  
 修して以て此れが活用に供して貰ひ度い。『參禪は自然に參するんだ』とか『喫茶喫飯  
 之れ參禪なり』とか云ふ事は易けれども行ふ事は八十の老翁も行ひ難ひのだから、  
 全くの實踐躬行―靜的も動的も何も彼も引つくるめた社會國家の法禪に參する之れ  
 眞の禪であらう。

要するに現社會に立つて活用の出來ぬ何の貢獻をも爲さぬ下手な坐禪は止めて、  
 七千の同胞 悉く吾が活禪に參じ紊亂せる今時の思想界に猪突猛進して一番、社會  
 國家を指導宣傳し一致協力事に當つて欲しい。所謂此れが上手な坐禪をした人と云  
 ふか。勝利の月桂冠は此の人に附與せらるゝのである。

## 人間性の表裡(上)

## 善悪表裡の標準

性と云ふ問題に就いては、性理學から心理學から或は論理學から其他あらゆる方面から西も東も之が研究に没頭して居る程難解な問題であるのだから、よし宗教より觀たとして其の考究が徹底しても、容易に性の全般を悉く了知し盡す事は勿論難いのである。性は善なり性は悪なりと云ふ儒道の性論者が名論卓説すら、性の一端を語るに過ぎざる如くに或識者間には喧傳せられて居るのである。それであるから何處から何處迄が性の表面であるか等とは、思ひも寄らぬ先の見えない愚論である。批判は下されても仕方はないが、而し性善と云ひ性惡と云ふ以上はたとへ、是が一端を語るに過ぎぬとしても性善が表か性惡が裏かどちらが怎かは且く措いて免

に角善惡の存する所必ず表裏ありと予は斷言するのである。

そして又性の善惡は人間性の表裏を標榜したのではあるが、性の表裏に至つては常に人間のみならず、動物植物の類皆其であると予は思ふ。換言せば性が表面に活動する場合と裏面に活動する場合とが必ず起つて來ねばならぬのである。動物植物が地上に生存して行く上に於ては、其自身を擁護する爲め且つは繁殖さす爲め、保護色から保護色、新化から新化と新陳代謝が免かれぬと同時に又、人間にも自然的不自然的に此眞理の免が得ざるは言を俟たぬ當然の條則でなければならぬ。所謂之が生物に於ける共通性即ち、慾の何れも變形體である。予は決して性學を論ずる者でもなく性慾の研究者でもないのだから、性其のものゝ理窟は述べ得られぬ。而し茲に人間性の表裏と云ふものゝ意味は、性の活動と云ふか或は心の作用と云ふか、つまり人間が社會に在つて夫れゝ處世上に發揮した形而下(易り易く)に觸れた問題の其の表裏と云つた様なものだから、事々物々見聞感知の其れである。重

ねて云ふ、『性』の問題でなく勿論デリケート的な研究でない事丈は御断りして置き度いのである。人間性には常に相対的傾向がある。一方に活動を好む性あれば一方には静止を欲する性がある。例へば紅塵萬丈の門巷を好めば必ず又竹籬郊外の境地に、自然の山水を愛すると云ふテンパーを有するものである。表面的のもので非常な佳麗的を愛好すると同時に、一方には裡面的のもので質素純朴を嗜好珍重がる。例へば同じ繪畫にしても水彩洋畫の艶美を賞せば地方には、墨繪の日本畫で風流なものに、自然の山水を愛すると云つた様に、自分の食ふ物一つでさへ好悪の差別があるから一様ではない。皆之れテンパーに表裏の二面が作用されて行く所以である。換言すれば前述の如く何れも慾の變形なのである。生物と云ふ中にも勿論人間には此の欲求性が無ければ寸時たりとも生存して行く事は不可能である。即ち欲を求むる性には善惡邪正の別あると同じく表裏の隔があり、向上的なものも向下的なものもある。最も常識によつて善であるのは何處迄も善で惡なのは何處迄も惡である。而し此の善惡も時

代に依り推移に應じて變り行くものであつて、昨日迄は一般が善であると認識して居たものが、今日になつて却て夫れが惡となる場合も無きには非れども、少數黨が認めたる善い事が多數黨で否定される時もある。

## 人間の本性作用

又種々な事情に依つてはたとへ自分が是であると確信した事、非と自認した事を東と云へば西と云ふ新に彼と反對に出で非どなし是となす事が間々ある。皆是れ人間性の常である。多少之れには群集心理作用も手傳つて居る場合もあるが總ては自己本位よりして其欲求を満たさんが爲めの夫れ夫れ發揮に外ならぬ。而し自己を忘却して事に當りて犠牲的に本性を發揮し、常識上誤認のない限り一般社會の善と公認した事に同意共鳴して獻身的に活動する人と、個人崇拜と云ふか兎に角事の是非を問はず、自己の名利を恣にせんが爲め傍若無人の行爲に出づる人あれば、苟しく皆人間性の發作的欲望と見做してよろしからう。勿論己れが欲望を満たさんが爲

の自失は犠牲と云つてもよいが前者を予は向上的欲望性後者を向下的欲望性と云ひ得るだらうと思ふ。即ち一方には進んで義を守り徳を修め、神佛の聖域に近づかんとするが、他方には又私利私慾を逞ふして獸慾的行爲を敢てなさんとするのである。非常に清淨無垢な高尚思想を喚起するかと思ふと其裏面には豚の如く狼の如き下劣な事を考へ出すと云つた様に轉々轉々、恰も掌を返すが如く尙表裏の變化が甚しいのがやはり人間性の特長である。此の變化の程度が多いのと少ないのとあり、急なると緩なるとありて一樣ではないと同時に、其人の爲す起居動作に優劣勝敗の別を來すのである。『彼奴あ!! 血の巡りが鈍い野郎だなあ』彼の野郎!! 馬鹿にチヨコくしてやがらあ』あなたは随分氣のかはり易い御方ですなへ』彼のの方は本當に上つ調子な人ね!』等と互選的に社會相互の間に噂をしたりしられたり、評判に花を咲かせたり散らせたりする世態人情の表面を現はす所以のものは、皆人間各自の本性作用が斯くあらしめたのである。

## 社會一局面の現象

俗に『酒飲み本性たがへず』と云つて飲酒家の己惚の如くに謂はれて居るが存外此の本性も當にならぬものであつて、素面素顔の平生底に於いて誤つた本性を發揮してござる人が社會の各方面見渡す限り充滿して居る様に思はれる。此頃に見る代議士選舉、競馬場は怎ふか。學者連中の心理状態は怎うか。實業家宗教家教育家其他藝術劇壇界を一瞥せば、其の性の發揮する所悉く表裏反覆の有様ではないか。代議士ばかりでは無い各方面の選舉消息の當時を云はゞ、其の裏面には表面と相反覆した事がある。一朝候補の槍玉にあげられたを幸に殆んど羽頂天になり上り自動車に打乗りて四六判大の名刺を配布し宣傳ビラを撒きちらし、各地遊説と云つた風に政見の發表演説をなす所迄は先づ示威的にも見え、自重家の如くにも見ゆれども其裏面に至らば驚くべし!! 賄賂の多少を争ひ、米搗蟲同様に叩頭する御世辭だらくとは情けない。一箇の政治家を自認する其の人格者たる者に至つては表面

には政治を執るが裏面には賄賂もとる。其理學說の研究に寢食を忘るゝて其の學者が、其裏面に至つては曲學阿世、學問其の者を金利の器にする。表面藝術家として立つ講談落語家や演劇家は其裏面に容易ならぬ不倫行爲を敢てなし安逸放蕩を恣にし、人に交つては幫間卑屈に墮在する。新聞記者は裏面に壯士と化し洋服ゴロツキとなり、紙屑買は表面で其の裏面は持ち逃げゴンドロ式、藝者は表面の看板倒しで淫賣が其裏面に内助の功ありと云ふ。『蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲』である。表面には美しい容粧をして居ても裏面には蛇を食ふ此頃の世帯流布と聞いては喫驚も甚だしい。社會改造の爲め貴顯紳士は勿論婦人淑女の何々會も、晝は公衆を集めて大演說會を催し、座に入れば辯士自身が淺酌低語して風俗壞亂の行爲なきや……予は茲迄遠慮をしながら社會の或一部を批判しては見たが、人道教化道徳鼓吹を本分とする吾が國家の宗教家に至つて必ずや、彼れ等に恥ぢざる事を自認確保し得るや否やは、予自身にも語を發するに難いので、坐禪觀法の眼を閉ぢて活きた達磨の

様な表面の其の裏面には三年前の借金の利子を打算するより、より以上の忌はしき事實が伏在しては居まいか。而し如上の表裏内外が人世の眞相人間性の然らしむる事實である事は何人も之を否定し能はぬであらうけれ共、人間性を超過した表面を突破した善惡のレコードを踏潰した所謂、絶對善としての人間性に就いての駄辯を弄して見やうかと思ふが。

# 人間性の表裡 (下)

## 性善性悪と善惡混在説

抑も性善論を主唱したのは其代表者たる孟子である事は一般周知の筈である。人間は生れながらにして良知良能を具備し本來善心の所有者であると説いて居る。如何に極悪非道の者と雖も將に川を目がけて飛び込もうとする橋畔の悲劇を見れば、其の人を助くるものである。此一瞬時一刹那に於ける悪人の性たるや、必ず良知あり良能ありて之を發揮し、仁愛の情禁じ難きは當然の事である。又如何に犇猛兇漢と雖も其の罪過を問はるゝ時には必ず、衷心より過去の罪業を慚愧して所謂良心の苛責に堪えぬであらう。此所が人間性の善なる所以である、併し人事百般社會的に個人的に之を見るに、向上的欲望の反面には向下的欲望ありて或は社會國家の爲にする

もあり、或は利己主義のみに走りて兎角不義非道の行爲を敢てするもある。依つて善惡邪正混亂紛糾東京市政の疑獄と云ひ第二シーメンスと呼ばるゝ滿鐵の醜惡と云ひたとひ其統治者なり被統治者なりが、性善であらうが性直であらうが事實が斯う現はれては孟子の主唱も唯々畫餅に了るより仕方がない。即ち惡も人間性の現象善も人間性の現象であるから、善が本性より出た行爲とすれば惡も亦其の本性より出た行爲と云はねばならぬ。それであるから善のみを人間の本性に契ふとし、惡は之に背くと云ふが如く性善説は一種の偏見ではあるまいか。

性善は性善で閑話休題とし茲に性惡論と云ふのが起つて来る。人間の性は本來邪惡のものであるとは荀子の説く所であつて、人は生れながら聲色の欲を具備して居て放逸淫蕩の風自ら生じ、名利の欲は又爭奪の慘害や擠陷の惡俗が行はれ、禮義仁道孝悌忠信の風は跡を拂つて滅び行くと云ふ有様、是れ人心の元來惡なる所以である事に歸着するのである。而し人には名利聲色の欲あるは事實としても、之と同時に

性善性惡と善惡混在説

人間には相愛し相憐むの性情を備へ、慈善も行ひ仁義も履み明に道德及宗教的發達を遂げて居る事實が社會的にも個人的にも目撃されて居る。人間性に元來道德心も宗教心も毛頭無いものこそせば、如上の相愛相憐の性情は出て來ぬ筈で、荀子の説の様に人間の仁義道德は本性の現象に非ずして皆虚偽であるとは斷定し能はぬと同時に、荀子の性惡論は個人的性情のみを本としたやはり偏見なものであると予は思ふ。

斯ふなつて來ると人間性は善でもあり惡でもあると云ふ司馬光や楊雄等の唱道した善惡混在説が最も思はれる。何故なれば人間性と云ふものが平生事なき時は善心も惡心も起るものではないが、一再逆境に遇へば必ず窮鼠猫を咬み羊頭狗肉の行爲を爲すものである。随分他人を侮辱したり傷けたりする。又逆境に處する時はかりでなく順境に處して居る時でも古人聖賢の佳言善行等に依つて忽ち發心し、所謂精神修養の心性を具備するのがある。即ち時と場合に依つて又事情に

依つて種々に變化する善惡混在の特性を有つて居ると云ふ。是れ最もな道理であらねばならぬ。吾人が時としては怒りもする泣きもする笑ひもする。一朝酒の爲めに正氣を紊せば平生思ひも付かざりし飛んだ罪過を招き、酒醒めて後悔ゆる事が往々にしてある。如何なる犯罪惡人と雖も翻然として悔悟した曉には仁人義士の聖徳を備ふる人格者となつて蘇る事が出来る。

善惡共無説は如何

然し此の善惡兩端と混合的に含むのが人間性の真相であり、完全な學説であるかと云へば決して其うではないと予は思ふ。人間性が元來善惡を含有して居るなら善も惡も吾々本性より起る自然の現象で、天の命する所と云はねばならぬ。善も惡も同量同質善が必ず善に非ず惡が必ず惡ではない。表面には善を粧ひ裏面には惡を行ふ點から眺めて善の爲さざるべからざる所以惡の避けざるべからざる所以を説明するになか／＼困難な事實が到來する。吾々相互が常に智徳を啓發して益々向上の聖域

に近寄らんとつとむる修養も涵養も、只單に性をして善に誘導せしむる方法に過ぎず、悪性を徹底根本的に排除滅亡して終ふ事は容易でない——否不可能な事實である——如何に聖人君子と雖も善惡混在説から是を云はゞ本然の性即ち一方の悪性を無くする事は出來得ぬ道理である。

然るに善惡共無説を主張した蘇東坡や胡五峰等の説意は又面白い。人間性は善でもなければ悪でもない。性は善惡を以て之を論すべきものでなく遙に善惡超越したものと云ふて居る。善でも悪でもないから善を以て之を導けば善となり惡を以て之を導けば惡となる。例へば靜平な池の水に之を喩へ、東西に導けば東西に流れ南北に導けば又斯の如く流るゝ道理池水其物には、西も東もないと云ふ。而し如上の共無説が至當の如くも思はれるけれど、元來善惡表裡の差別がないものならば勿論人間其者の行爲に善惡の起る道理は無い筈である。性に善惡なければ人間にも亦善惡はない。池水にしても元來低きに流るゝ特性を有して居るから、東西南北何れも低

き方に向つて流るゝけれど東西に流るゝ性を有せぬ水は到底東西に流るゝ事は出來ぬであらう。善惡共無説も茲に到つてはやはり完全な説とは云ひ得られぬのである。予は是より予が立場より所謂、禪より觀た人間性の如何を誠に不完全ながら説いて見たいと思ふ。

禪本來の立場から

抑も禪本來から云へば自己の本性を明かにするとか、心性を徹見するとか云ふてお互の本性を看破して以て其の命するまゝに、行をやつて行くのが目的となつて居るので、悟道と云ふものが決して世間と離れゝの者ではなく人性の真相を看破して而も之を社會に國家に家庭に乃至は自分自身の處世上に活用宜しきを得るものと云ひ得らるのである。所謂本當の社會學人間學の根抵であらねばならぬ。つら／＼世の中萬般を見渡せば決して惡人は無い善人のみである。只善其物に大小廣狹あり深淺高低はある。大よりも小廣よりも狭、深よりも淺高よりも低と比較的善



に對して惡と名付たまでであつて、より以上の善を爲す事に依つて人間性の現象に善惡があらはるゝのである。吾が禪に於ける心性と云ひ佛性と云ふ其の絶對善は惡に對するの謂ではなくて、性善も性惡も善惡混在も無善無惡も總て一團として之を超越した至善性を意味したのである。即ち惡が無ければ善もない所本然眞性をば無上善と云ひ絶對善となす。此の心性を看破した所が所謂本來の面目に接したと云ひ徹見了々豁然大悟したものと云ふのである。此の心こそ萬境に隨つて轉じ、轉ずる所實に能く幽なる所以である。絶對の二字には善惡邪正の別もなければ總て相對的解釋を附する丈けそれだけ蛇足に落在して終ふ。而し善と云ふ方が此の場合分り易いから絶對善と付けたまでのもので、絶對ならば善だの惡だのと云ふ必要はなくなる。假に本性は絶對惡なりと云ふても差支はないのである。何故なれば前述の如く惡に對する善でなく善に對する惡でないのだから。而して又此の絶對善より見れば、性善説も性惡説も善惡混在説も無善無惡説も總て此の中に包括せられて居る赴きが充分

ある。其れであるから人間性が善であるか或は惡であるかの問題は一朝一夕の論ではないと同時に、善と思つた性の表現が惡に化する事もあり、惡と信じた其の現示が存外に善である事が、社會人事の上によく目せらるゝのである。

## 絶對善の特長

そこで性善とか性惡とかの話も此の場合必要ではあつたが表題『人間性の表裡』から眺むれば性善説も性惡説乃至其他の諸説も迂廻の感がある様に思はれる。一つは人間の絶對善から出た表裡の現象體として考究する必要がある、又其れが最も主觀にも客觀にも亘つて觀察し得らるゝものであらうと思ふ。其れには一つの誤らざる常識眼も入るだらうし當事者夫れ自身の人倫的行爲と人格的性情とに依らねばならないけれども、其時の成行きやら周圍の事情の如何やら、當人自身の境遇やらが相纏る爲に容易に之を主觀的にもせよ、客觀的にもせよ、鑑別し得らるゝものではない。而し大體に於て否寧ろ一般が盜者を排し仁者を容るゝが本當であらね

ばなるまいし、善を見て喜び悪を見て悲むのが人間性の然らしむる所だらう。然し其の性が麻痺して居る爲か常識の缺けた結果か何しろコンマ以下になり下つて居る人は別であるが、善悪邪正は十人が十人皆其の歸趣が同然である。予は信するのである。放火狂とか色情狂とか、ら眺むれば火をつけぬ者色を弄ばぬ者を指して人間性の裡面を亘る違反者かの如く思ふかも知れぬが、茲が所謂絶對善の特種な所であつて、絶對善を具備して居る吾々モット臭みを帯びて云へば佛性を備へて居る吾々ならば、一事一物たりとも夫れの善悪長短位は分るものであると同時に、惡いと知らず迂カリ手出しは出來ないのである。夫れを惡事と知つて敢て行爲をする輩に至つては無常識も言外であり、人間性論の圏外である。放火狂が放火せぬ者を見て反性者と思ふに異ならない。願はくば此の各自に具有する絶對善の人間性を發揮して以て、人間性の表面を誤らざる常識を以て進み、現社會に各自の本能を活用して行つて欲しいのである。人間性には表裡善惡の別はない筈だが、其れ自身の欲求

から行爲を敢てする事の現象に依つて、秘密と公然表面と裡面善的と惡的との差を生じ動もすれば社會の人心を動搖さす様な事實も各所に出て來るのである。

## 信仰と運命

### 運命の二途

運命は二重三重でなく數多重なり合つて居る。運命と云へば人生、悉く運命ならざるはなく生れ落ちてからは勿論、生れぬ先きから確つて居るものである。其人々々に依つて肉體の遺傳あり財産又は負債の残つたのがある。が而し其の取り巻いて居る運命を開拓して新たな運命を迎ふると云ふ事も亦一の運命でなければならぬ。働きさへすれば必ず富豪になれるかと云ふに却々其うでない。勉めさへすれば必ず大偉人になれるかと云ふに又其うも行かぬ。三井岩崎の様に大隈山縣の様になる人は社會を見渡して先づ尠ないのであるが、處世上一般を考慮すると、運命で致し方なしと見た時は一奮發すれば致し方ある運命となる事が往々ある。人を知る事は難

いが自らを知る事も亦却々難いものである。長所も短所も其うであるから案外に長所順境の潜んで居るを知らずに過ぐる事があるが、却つて逆境に遭遇し乍ら其人の働き次第腕次第技術次第で思はぬ幸運を拓く事がある。之と同時に他の一面は正しく運不運に依つて怎する事の出来ぬ場合も見出される。

鼻の高い低いや眼の大きい小さい、色の白い黒い乃至社會萬般の事々物々悉く運命次第と観る人もあれば、又全く運命等は決して無い者と主張する人もあるが、何れも一方向きの擔板漢。白粉を塗れば白くもなるし、鼻を高くしたければ隆鼻術もあるのだ。佛教信者許りではないが、動もすると何事も皆前世の因縁と諦める人が多い。貧乏するのも病氣をするも子に別れ妻に先き立たるも皆前世の因縁と諦め萬事萬端悉く因縁に寄する習慣がある様に思ふが。是れ運命の過信と云ふものである。而し又一方運命を知らずして人力萬能を叫んでも人生、悉く我意の欲する儘にはならぬ。思ひに任せぬと其所には煩悶懊惱悲觀が湧いて來て華嚴淺間は昔の事

にしても、猫イラズや吊紐沙汰は免かれなくなる。現今の如き社會主義の馬鹿者や淫祠邪教の迷信者の續出するは、斯の如く單に一方のみを過信するの結果であつて完全に此の調和が取れぬ所以であると思ふ。運命の話をするに先づ二通りの見方がある。吾人が母胎を飛び出し孤々の聲を擧げた時既に定つて居る生得の運命と、成長後に於ける後得の運命とである。後得の運命は生得の運命と全然反比例に出づる場合がある。先づ生得の運命を大別すれば生れた所、生れた時、生れた家、生れた親、生れた吾身體、云はゞ此の五つの原因が其人生を一貫して種々の結果を齎すのである。其所で此五つのものが其人に依つて、順境に行く筈のものが逆境に行つたり樂觀的に進展すべき事も悲觀的懊惱に悶える事になつたりする。之が後得の運命と予は思ふのである。

所

假令ば東京に生れた人と田舎に生れた人を比べると、何れが幸運かと云ふ問題を

出せば、東京の劇場にせよ寄席にせよ、湯屋にせよ酒場にせよ田舎では夢にだも想像出來ぬ事が多く見聞せられる。或田舎へ行けば今日でも尙汽車や電車や自動車や瓦斯電燈の類を知らぬ土地が多くある。東京にあつては一つの觀劇にしても當代一流の人に接する事が出来るし、演説教談の類又然りである。學術技藝を修めんとしても田舎の學校よりも科學的智識の完備した都會の學校に如くはない。同じ小學教育を授けても都會と田舎殊に樺太琉球邊とでは雲泥の相違がある。織田も豊臣も又は家康も何故驍名を天下に轟かして偉人と呼ばれたか。古今通じて武士も學者も僧侶も其成功者として恰も幸運兒の如き觀察中にある人々は、其生れた所仕事をした所、學問修業した所を得たからである。上杉や武田が信長の爲に天下を取られて終つたと云ふのは云はゞ所を得なからである。若上杉武田をして東海を中心にして居らしめたならば定めて天下を統一したらうと思ふが、之が今云ふ運命の支配と云ひ度い。吾人が若しも朝鮮支那印度等に生れたとしたら隨分堪え難き事實に煩悶せね